

生駒市景観形成基本計画 (案)

平成 年 月

生駒市

<目 次>

はじめに ～わたしたちの暮らしと景観～	0-1
1. 暮らしと景観のつながり	0-1
2. 生駒の景観の成り立ち	0-2
3. 基本計画を策定する意義	0-3
(1) みんなが大切に思う景観を守る	
(2) 多くの人の目に触れる景観の魅力を高める	
(3) 暮らしの景観を育む	
(4) 景観からまちづくりを考える	

第1章 景観づくりの理念と姿勢

計画の位置付けや構成などの基本的な事項と景観づくりの理念、姿勢を示します。

1. 計画の位置付け	1-1
(1) 「生駒市景観形成基本計画」とは	
(2) これまでの経緯	
(3) 施策等の展開や連携	
(4) 今後の「生駒市景観形成基本計画」	
2. 景観づくりの理念	1-3
3. 景観づくりの姿勢	1-4
(1) 生駒らしい景観の特徴を理解する	
(2) 生駒らしい景観を構成する要素を見出す	
(3) 市民・事業者・行政が協働で生駒らしい景観をつくる	

第2章 生駒らしい景観の特性

地勢、地域性、暮らしの視点から生駒らしい景観の特性を示します。

1. 地勢	2-1
(1) 生駒の地形の骨格	
(2) 生駒山の存在感	

(3) 緑のまとまりとまちの関係	
2. 地域性	2-13
2-1. 集落の歴史	2-14
(1) 集落の成り立ち	
(2) 受け継がれてきた伝統	
2-2. 住宅地開発の流れ	2-25
(1) 住宅地の開発と地形	
(2) 住宅地の個性を生み出す要素	
(3) 計画的に開発された市街地	
2-3. にぎわいと心の拠りどころ	2-35
(1) にぎわいの空気	
(2) 住宅地の駅周辺の空気	
(3) 幹線道路の空気	
3. 暮らし	2-42
(1) 何気ない暮らしの景観	
(2) 生業の景観	
(3) 記憶の原風景	
(4) 活動の景観	

第3章 パターンによる生駒らしい景観づくり

景観の特性から導き出した生駒らしい景観のパターンを使った景観づくりの方法を示します。

1. 生駒らしい景観のパターン	3-1
パターン1 生駒のシンボル・生駒山	3-7
パターン2 屋根なみに浮かぶ緑の島・緑の帯	3-9
パターン3 ヤマ・ムラ・ノラの調和	3-11
パターン4 見渡す眺望	3-15
パターン5 見通す眺望	3-19
パターン6 緑にとけ込む建物	3-22
パターン7 緑のスカイライン	3-26
パターン8 生駒山の修験の領域	3-29
パターン9 顔となる空間	3-31

パターン 10	人が交わる場所	3-34
パターン 11	曲がった道	3-39
パターン 12	坂道の見上げと見下ろし	3-42
パターン 13	通りのプロポーション	3-45
パターン 14	連歌式	3-50
パターン 15	高低差の尊重	3-54
パターン 16	商いのコミュニケーション	3-56
パターン 17	すっきり感	3-59
パターン 18	暮らしのにじみ出し	3-63
パターン 19	なりわいがつくる景観	3-65
パターン 20	聖なる場（パワースポット）	3-69
パターン 21	人の手が加わる余地	3-72
パターン 22	人にあった尺度	3-74
パターン 23	期待感	3-77
パターン 24	表出する緑	3-81
パターン 25	どこでも緑	3-88
パターン 26	しきりとつなぎ	3-92
パターン 27	受け継がれてきたデザイン	3-96
パターン 28	生駒石	3-99
パターン 29	仮設の風景	3-101
パターン 30	移ろいの風景	3-104
パターン 31	記憶の風景	3-110
2. パターンを組み合わせた景観づくり		3-113
2-1. 景観づくりの手順		3-113
2-2. 景観づくりの具体的な方法		3-114

第4章 身近なまちの景観づくり

立場の違いやまちの特徴に沿った身近なまちの景観づくりの方法を示します。

1. 身近なまちの景観づくりに向けて 4-1
2. 立場に沿った景観づくり 4-2
 - (1) まちの景観に寄り添う「市民」の景観づくり
 - (2) まちの景観ににぎわいをもたらす「事業者」の景観づくり
 - (3) まちの景観を整える「行政」の景観づくり

- 3. 身近なまちの特徴に沿った景観づくり …………… 4-5
 - (1) 「住宅地」の景観づくり
 - (2) 「商業地」の景観づくり
 - (3) 「集落」の景観づくり

第5章 景観形成の推進施策

生駒らしい景観づくりを推進するために市が取り組む施策を示します。

- 1. 景観形成を推進するための施策の枠組み …………… 5-1
- 2. 市民や事業者による景観づくりの取組の促進 …………… 5-2
 - (1) 意識を高める
 - (2) モチベーションを高める
 - (3) 活動の芽を育み広げる
 - (4) 活動を充実させる
 - (5) ルールづくりを支援する
- 3. 景観を守り育てる規制誘導 …………… 5-8
 - (1) 景観の大きなまとまりを守る ～地域の景観づくり～
 - (2) 特色をいかした景観づくりを進める ～地区の景観づくり～
- 4. 景観をつくる公共事業の実施 …………… 5-10
 - (1) 市が取り組む公共事業の景観形成
 - (2) 国や県が取り組む公共事業の景観形成
- 5. 景観施策の総合的な推進 …………… 5-11

巻末資料

- 1. 計画の検討経過 …………… 巻-1
- 2. 審議会・委員会・懇話会名簿 …………… 巻-3
- 3. 懇話会参加者から …………… 巻-*
- 4. 計画策定にご協力頂いた方々 …………… 巻-*

はじめに ～わたしたちの暮らしと景観～

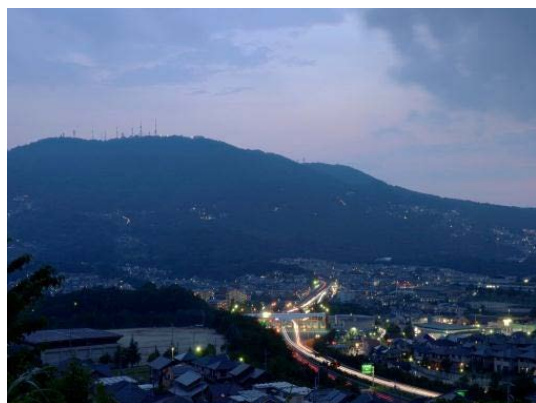
1. 暮らしと景観のつながり

わたしたちの身の回りに目を向けてみてください。

かつて生駒には美しい田園の風景がどこにでも見られました。しかし、農業をする人が少なくなった現在では、北部と南部の集落でしか見られなくなりました。田園の風景は生業としての農業の営みがあるからこそ残されているのであり、何もせずに、この美しい風景が将来にわたって継承されていくとは限りません。

また、最近は幹線道路沿いにいろいろなお店が増えてきました。その背景にはマイカーを利用する人が飛躍的に増えたことがあります。

暮らしが変わることにより風景が変わっていく。つまり、わたしたちの暮らしが目に見える形となって表れたのが「景観」です。良い景観をつくっていくためには、わたしたちの暮らしのあり方をもう一度考え直し、時には変えていかなければならないこともあります。景観の魅力を高めるということは、わたしたちの暮らしの魅力を高めていくことであるともいえます。



景観は、暮らしが目に見える形となって表れたもの

<景観とは？>

「景観」とよく似た言葉に「風景」や「景色」があります。「景観」は「風景」や「景色」と同じように、自然や市街地の視覚的な眺めを表す言葉ですが、「観」という文字が入っているところがポイントです。「世界観」や「人生観」などの言葉があるように、「観」にはものの見方や考え方という意味があります。つまり、「景観」とは見る人の考え方が反映された眺めということになります。

2. 生駒の景観の成り立ち

本市は、生駒山の麓に位置し、生駒谷の竜田川そして富雄川の流域にあって、谷筋に農地、集落、里山が一体となった田園の景観が広がる地域でした。この生駒に定着していた景観は、長い時間をかけてコミュニティの中で育まれてきたものであり、人の生活と景観が一体として成立していました。

歴史に目を向けてみれば、宝山寺は古くから信仰を集める寺院として栄え、訪れる人をもてなすために門前には旅館やお店などが軒を連ねました。時を経た現在でも、参道筋を中心に昔を偲ばせるまちなみを見ることができ、参詣の文化を映したまちなみ景観といえます。また、生駒山を御神体として祀っていたと考えられる往馬大社は、日本有数の古社であり、本殿は七連のかすがつくりひわだぶき春日造桧皮葺、境内は鎮守の柱に覆われていて、奈良県の天然記念物「社そう」として指定されています。周辺には住宅地が広がっていますが、太古の昔から変わらない自然の森を残すその姿は、自然に対して畏敬の念を抱いていた日本人の心を象徴するような厳かな景観をつくっています。



人の生活と景観が一体となって成り立っている集落景観と田園景観



参道沿いのまちなみ景観

やがて、鉄道が敷設されるとともに、生駒山に象徴される緑豊かなイメージを背景として、沿線部に計画的な住宅地が次々と整備され、都市化が進展してきました。住宅地はその時代の暮らしや社会の様子、建築技術などを反映し、それぞれの時代ごとに特徴あるま

ちなみを形づくってきました。

一方、行政は、生駒山系や矢田丘陵に代表される緑豊かな自然を保全しながら、良好な住宅地景観を形成していくために、地区計画などのルールを定めて誘導を図ってきました。こうした経緯の中から現在の生駒の景観がつくられてきました。

3. 基本計画を策定する意義

(1) みんなが大切に思う景観を守る

生駒山系や矢田丘陵などの山なみ、竜田川や富雄川などの河川の流域がつくる地勢は、本市の景観の骨格であり、大きな特徴として誰もが認める大切なものです。このため、立場は異なってもみんなが「大切である」という思いを共有しやすいものです。

みんなが大切に思う景観は、適切な保全の枠組みを定め、将来にわたって継承していくことが必要です。本計画では、みんなが大切に思う景観をきちんと守っていくための考え方や道筋を示します。



地勢がつくる生駒の景観の骨格

(2) 多くの人の目に触れる景観の魅力を高める

駅前や幹線道路沿いは多くの人が行き交い、多くの人の目に触れる機会も多いことから、住む人や訪れる人にとって生駒のイメージとなる、いわば「顔」となる場所です。このような場所の景観の魅力を高めることは、生駒全体のイメージアップにつながるため、景観を考える上では非常に重要なことです。

景観は多くの人がかかわり、それぞれの事業や建築行為などが重なり合って形づくられるものであり、目指すべき姿を共有し、お互いに協力しながら実現を目指していくことが重要です。本計画では、多くの人の目に触れる景観の魅力を高めるための考え方や道筋を示します。



顔となる駅前の景観

(3) 暮らしの景観を育む

本市の景観を構成する大部分が、住民が普段の暮らしの中で接する普通の景観（「生活景」）です。歴史、風土、文化などが息づく地域もありますが、特に個性が際立つ地域がたくさんあるわけではありません。そのため良い景観についての思いも人によって様々であり、あるべき将来の景観の姿を共有することが難しいといえます。しかしまちの景観を育んでいくためには、将来のまちのあるべき姿を共有し、その実現をお互いに協力しながら目指していくことが重要です。

まちにかかわる活動を楽しみながら広げていくことで、暮らしがいきいきとなり、良い景観づくりにつながっていく、そんな取組も出てきています。

本計画では、上記のようなことを踏まえて、わたしたちが日常的に接する暮らしの景観を育んでいくためのヒントや道筋を示します。



暮らしの行動が景観を育む

(4) 景観からまちづくりを考える

かつては、コミュニティの中で受け継がれてきた風習や文化が地域に色濃く反映され景観をつくっていましたが、高度経済成長期以降には住宅を商品として購入する時代となり、さらに少子・高齢化や情報社会の進展とともに、空き家・空き地問題やコミュニティの希薄化が全国的な課題となっています。このような状況は住宅都市として発展してきた本市も例外ではなく、同じようなことがまちの中で起こり始めています。

本計画では「つくる」から「守る」「手入れする」ことに時代が変わりつつある中で、見た目だけではなく、住まい手の顔が見えるまちの育て方など、今までとは違った視点でまちの問題について考え、話し合うための一つのきっかけとなるのが景観だと考えています。

わたしたちの暮らしが目に見える形で表れた景観という視点を通して、まちについて考えてみることで、問題解決の糸口が見つかるかもしれません。

第1章 景観づくりの理念と姿勢

第1章では、計画の位置付けや構成などの基本的な事項と景観づくりの理念、姿勢を示します。

1. 計画の位置付け

(1) 「生駒市景観形成基本計画」とは

「生駒市景観形成基本計画」は「生駒市景観条例」に基づいて定めるもので、本市の最上位計画である「生駒市総合計画」に則したものです。

(2) これまでの経緯

本市では、平成6年3月に市全体の景観づくりに関する指針として「生駒市都市景観形成ガイドプラン」を、また、より具体的な景観づくりを促進するため、地域の特性に応じた景観づくりの指針を示した「生駒市景観形成基本計画」を策定しました。

その後、平成16年に景観法が施行され、本市も平成23年1月1日に同法に基づく景観行政団体となりました。平成22年12月27日に生駒市景観条例を制定するとともに、平成23年4月1日には景観法に基づく生駒市景観計画を策定し、景観に関する法的な規制の枠組みを整えました。

生駒市景観計画の策定により、景観行政団体として一定の規制の方向性は担保されたものの、景観条例に規定された本市の景観に係るマスタープランとして生駒市景観形成基本計画の策定が必要となっています。上述の二つの計画が策定されてから15年以上が経過した現在、本市の景観の大きな構造は変わっていませんが、鉄道沿線での住宅地の開発や学研都市の整備が進んできたことにより、市民・事業者・行政のまちづくりに対する考え方は大きく変化してきています。生駒市景観形成基本計画は、こうした変化を踏まえ、将来の本市における景観づくりの方向を示していくために、二つの計画を統合し策定するものです。

(3) 施策等の展開や連携

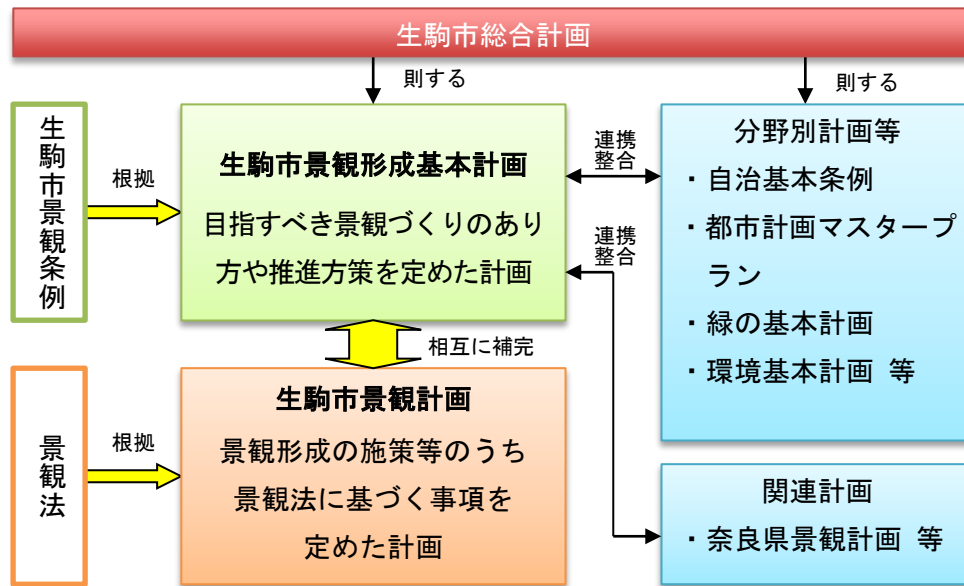
本計画の推進に当たっては、生駒らしい景観づくりの方法についての啓発や、定着を目指した取組を進めていきます。景観法に基づく建築物等の規制等を定める「生駒市景観計画」をはじめとした、良好な景観づくりに向けた様々な施策も併せて展開していきます。

自治基本条例等の関連条例のほか、「都市計画マスタープラン」「緑の基本計画」「環境基本計画」等の分野別の計画との連携・整合を図り、さらに奈良県が定める「奈良県景観

計画」とも連携・整合しながら、良好な景観づくりを進めていきます。

(4) 今後の「生駒市景観形成基本計画」

本計画は、本市の景観を取り巻く状況や、景観づくりの取組の進展に則して、必要に応じて見直しを行うものとしします。



生駒市景観形成基本計画の位置付け

<基本計画と景観計画は何が違うの？>

景観計画は、景観法に基づく建築物等の「規制」を中心とした事項を定め、建築等を行う時に守るべき最低限必要なルールを決めています。

しかし、「規制」は良好な景観づくりのための手段の一つです。景観づくりは市民・事業者・行政がそれぞれの立場に応じた役割を担いながら、協働で取組を進めていくことが必要です。

まずは市民・事業者・行政が生駒らしい景観を理解できるように、また景観づくりについての意識が高まるよう「啓発」し、景観づくりにかかわる様々な取組を「誘導」し、取組が円滑に進むように「支援」することにより、市民や事業者の取組を促進し、公共事業において「良好な景観づくりを先導する」等総合的に推進方策を考えていく必要があります。

基本計画は、協働の取組の拠りどころとなる生駒らしい景観や、景観づくりのあり方、その推進に向けた様々な方策を定めた、景観づくりのマスタープランとしての役割を担うものです。市民・事業者・行政が基本計画をもとにして、良好な景観づくりに向けて一丸となって取り組んでいくための指針となるものです。

2. 景観づくりの理念

わたしたちは、生駒らしい景観が、本市にかかわるすべての人の共有のものであることを認識するとともに、異なる立場の人が、それぞれに地域社会の構成員であることを認識し、相互に協働しながら、守り、つくり、育て、時には改めて、次代を担う世代に残していかなければなりません。

そのため、次のように理念を定め、良好な景観の形成を進めていきます。

【理念】

- 生駒らしい景観の特性を読み解き、地勢、地域の特性に応じた景観形成を図ります。
- 豊かな緑に彩られた住宅都市である生駒の景観を尊重した景観形成を図ります。
- 歴史や文化に今一度目をむけ、生駒を再発見できる景観形成を図ります。
- 生駒にかかわるすべての人が快適な生活を享受でき、将来の世代に引き継げる景観形成を図ります。

3. 景観づくりの姿勢

景観づくりの理念を踏まえ、生駒らしい景観づくりに取り組んでいく時に、特に大切にすべき考え方を景観づくりの姿勢として示しています。

(1) 生駒らしい景観の特徴を理解する

将来における本市の景観づくりの方向を考える上では、これまで培ってきた良い景観の特徴である景観面での生駒らしさの本質（「無名の質」※）を理解する必要があります。「生駒らしい良い景観をつくっていこう」といっても、「生駒らしい景観」とはどのようなものなのか、また何が「良い景観」なのかが分からなければ、どのような景観を目指せば良いのか分からないからです。

多くの人が訪れるような歴史的景観や都市的景観の特徴とは異なる本市の景観は、大部分が日常の何気ない「普通の景観」です。その中にある良いものを見つけ、どのようにいかせば良いのかを考えていくことが景観づくりでは重要になります。

まずは、生駒らしい景観の特徴を知るために、生駒らしい景観が生み出されている背景にまで目を向け深く理解することが、生駒らしい景観づくりのはじめの一步です。

無名の質とは

建築家クリストファー・アレグザンダーが著書『時を超えた建設の道』の中で示した考え方です。

人に感動を与える歴史的建造物と、人に感動を与えない近代の建造物や都市との間にはどのような違いがあるのかを追求する中で、その違いは、一言では名付けることができない知覚や経験の「質」によるものだという考えに至り、その言い表せない質を「無名の質」と呼びました。

(2) 生駒らしい景観を構成する要素を見い出す

生駒らしい良い景観の特徴が分かったとしても、どのように成り立っているのかが分からなければ、具体的にどうやってつくっていけば良いのか分かりません。

誰もが何となく感じる良い建物や良いまちには、実は普遍的な共通の要素があります。これらの共通する要素をパターンとして見出し、誰もが使えるようにすることで、いきいきとした建物やまちを生み出すことができる、という考え方が「パタン・ランゲージ」(※)です。

生駒らしい景観をつかっていくためには、それらがどのような要素で構成されているのかを見出ししていく必要があります。「パターン・ランゲージ」の手法を取り入れながら、生駒らしい景観に共通する普遍的な要素を「パターン」として見出し、うまく組み合わせることで、生駒らしい景観をつかっていくことが可能となるのです。

パターン・ランゲージとは

クリストファー・アレグザンダーは1977年に『パターン・ランゲージ』を著し、人々が「ここちよい」と感じる環境の質を分析して、計253のパターンを挙げ、それらの組み合わせ・関連によって都市をつかっていく方法論を提示しました。

日本でも神奈川県^{まなづるちょう}真鶴町の「美の条例」や、埼玉県川越市の67のパターンから成る「川越一番街町づくり規範」がつくられています。

(3) 市民・事業者・行政が協働で

生駒らしい景観をつくる

景観は骨格となる地形の上に、これまで培われてきた地域形成の歴史が重なり、人々の営みが展開された結果、目に見える環境として表れてくるものです。つまり、景観は様々な立場の人々の営みによってつくられているのです。

景観づくりは、市民・事業者・行政といった立場の違いを超えて協働で取り組んでいくことが必要です。立場の異なる人々が、それぞれの立場に応じた方法により、共通の目標を目指して取り組んでいくことが協働です。協働を進めていくためには目標像を共有することが必要となります。

生駒らしい景観を目指して協働で取り組んでいくためには、まずは生駒らしい景観の特徴を理解した上で、特徴を構成する要素を見出し、その要素を組み合わせることで景観づくりを進めていくという方法を共有しなければなりません。

そしてそれぞれの立場からできることを考え、主体的に取り組んでいくこと、お互いが連携することで取組の効果を高めていくことができます。

第2章 生駒らしい景観の特性

第2章では、「地勢」「地域性」「暮らし」の視点から生駒らしい景観の特性を示します。

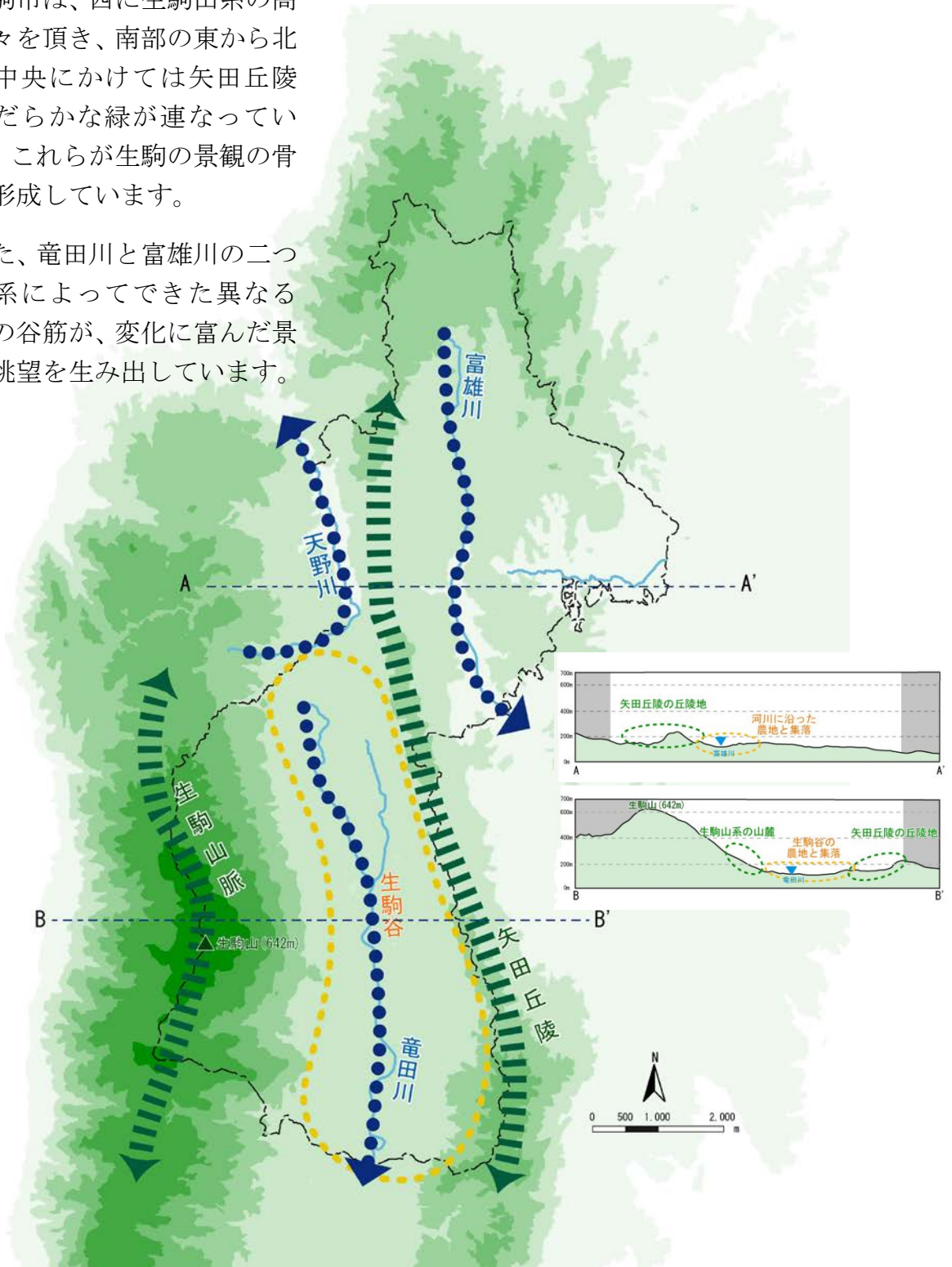
1. 地勢

生駒の地形が形づくる
景観の骨格

(1) 生駒の地形の骨格

生駒市は、西に生駒山系の高い峰々を頂き、南部の東から北部の中央にかけては矢田丘陵のなだらかな緑が連なっています。これらが生駒の景観の骨格を形成しています。

また、竜田川と富雄川の二つの水系によってできた異なる地形の谷筋が、変化に富んだ景観や眺望を生み出しています。



生駒の地形の骨格

1) 生駒山系と矢田丘陵がつくる生駒谷

百人一首にも詠まれ、紅葉の美しさで名高い竜田川。その流域は、生駒山と矢田丘陵の緑に囲まれた谷で、通称「生駒谷」と呼ばれてきました。

生駒山は竜田川の西側に沿うように南北に伸びています。竜田川周辺から眺める生駒山は、お椀型で独立した美しい形の山です。

一方、それより低い東側の矢田丘陵も、生駒山と並行するように緩やかな緑の壁をつくり出しています。生駒谷が「谷」の印象を深くしているのは、富雄川流域と比べて東西を山に守られた印象からもたらされるのではないのでしょうか。

また、生駒山の山麓や矢田丘陵の斜面にある住宅地からは、互いに谷の向かい側が良く見渡せます。このように「生駒谷」がつくる凹型の地形によって、「見上げる、見下ろす、見渡す、見通す」という、様々な角度の眺めを楽しむことができるのです。



市役所付近から見上げた生駒山の眺め（東新町）



宝山寺付近から見下ろした眺め（門前町）



国道168号を見通す眺め（壱分町）



見渡す眺め（南山手台）



富雄川の河川景観（上町）

2) なだらかに広がる 富雄川流域

北から流れる富雄川の水源地は、江戸初期に開掘された黒添池くろんどいけです。市の北端・高山町の中でも北の山地にある黒添池から流れる富雄川は、南に行くほど起伏がなだらかになり、周辺も広がりのある景観になります。



田園景観（高山町）

高山町の南の方では、田んぼが広がっていて、その周りを里山が取り囲んでいます。そのためでしょうか、富雄川流域では、生駒谷のように互いに向かい合うという感じはなく、川を中心に空間がこちよく広がっている感じを受けます。



矢田丘陵から見た生駒山（小瀬町）

（２）生駒山の存在感

１）いつもそこにある生駒山

生駒山の姿は、生駒谷のあらゆる場所から目にすることができます。みなさんも「生駒山の方に向かって右（左）」といったふうに、無意識に方角の手掛かりにしていることもあるのではないのでしょうか。

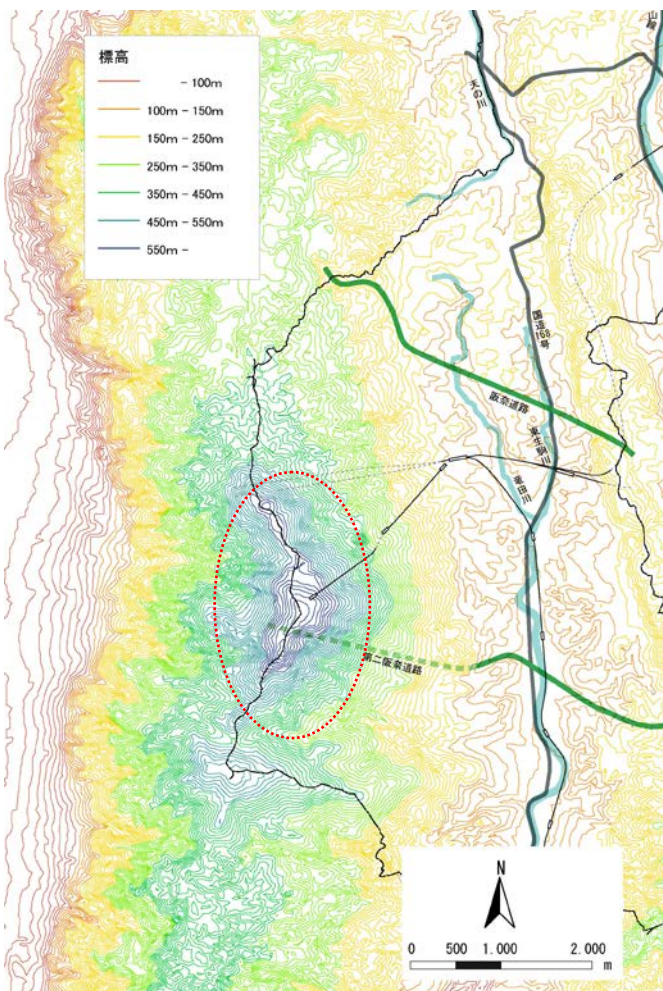
特に意識はしなくても、いつもそこに生駒山がある——それだけで安心感を与えてくれる生駒山は、なくてはならない生駒の景観の要素となっています。

生駒山 東から／西から

生駒谷側から見た生駒山は、山と谷の距離が近いことから、独立した美しい峰でありながらすぐそこにある親しみ深い山として、わたしたちを都会の喧騒から守るようにそびえています。

一方、大阪側から見る生駒山はまた別の表情をしています。南北に 27 キロという長さで連なっている生駒山地として、その姿はまるで奈良と大阪を隔てる屏風のようなのです。

生駒山の東斜面はかつて地底でした。それが西に隆起して高い峰をつくり出したので、東西は地質も景観も違ってきます。等高線を見ると、生駒山系は全体として標高 350～450 m 程度のなだらかな山なみを形づくっていますが、標高 550m 以上の山頂部は生駒側に突き出した形になっています。生駒側からは独立した峰のように見えるのは、そのせいかもしれません。



生駒山を中心とした標高図



生駒谷側から見た生駒山



大阪側から見た生駒山



「生駒聖天」の名で全国から信仰を集める宝山寺と境内の般若窟（門前町）

2) 信仰の対象としての生駒山

生駒山は昔から、その神聖な姿により、遠く離れた所からはるかに拝む遙拝の対象ともなっていました。万葉集には、九州におもむく防人たちが、大阪湾から生駒山を仰いで詠んだ郷愁の歌も残されています。

難波門を漕ぎ出してみれば神さぶる
生駒高嶺に雲ぞたなびく

（万葉集・巻二十）

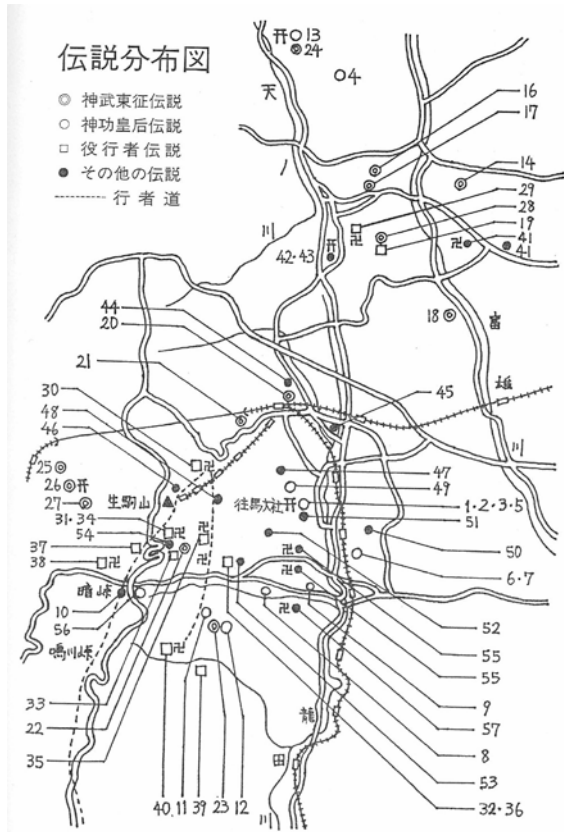


往馬大社（壱分町）

往馬大社は、古い書物にも名前が登場する歴史ある神社です。生駒山を御神体として祀っていたと考えられており、山頂からちょうど真東の方向に位置しています。

また、生駒山中は、山へ籠もって
 厳しい修行を行うことにより、霊力
 や悟りを得ることを目的とする修
 験の場もありました。現在でも、い
 くつもの行場があります。

宝山寺は、約 300 年前に湛海律師
 が中興開山し、「生駒の聖天さん」
 と呼ばれ、市内外から信仰を集めて
 きました。般若窟と呼ばれる岩屋で
 は修験道の開祖といわれる役
 行者が吉野の大峯山や金剛山など
 を開く前に、宝山寺で般若経を書き
 写して納めたと言われており、弘法
 大師も修行したと伝えられていま
 す。そのような伝説にちなんだ史跡
 が生駒谷の各所に伝承されていま
 す。



伝説の分布

出典：『生駒谷の祭りと伝承』桜井満、伊藤高雄編

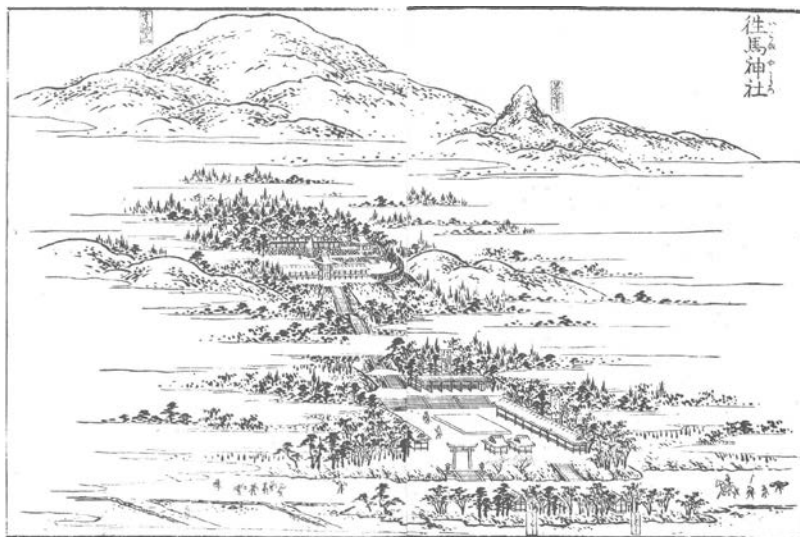
生駒山がそのような数々の伝説に彩られていることを知れば、生駒山を見る目が変わってくるのではないのでしょうか。

名所図会に見る生駒谷

昔の生駒谷の景観は、江戸時代の観光ガイドブックとも言われる「大和名所図会」や「河内名所図会」に描かれています。

上の絵には生駒谷十七郷の氏神である往馬大社が描かれています。背後には生駒山が鎮座しており、御神体として祀られていたと考えられることがよくわかる絵です。昔も今も、往馬大社に参詣すると、自然と生駒山に向かって手を合わせる格好になっているのです。

下の絵には宝山寺が迫力のある般若窟とともに描かれています。生駒山のこうした巨岩・巨石が露出する場所は、昔から修験のための場所として知られてきました。



往馬大社と火祭り

往馬大社は、正式には往馬坐伊古麻都比古神社いこまにいますいこまつひこじんじやと言ひ、平安時代に編纂された延喜式にも載る式内社で歴史ある神社です。

お祀りされているのは、伊古麻都比古神いこまつひこのかみ・伊古麻都比賣神いこまつひめのかみをはじめとする7柱の神様です。平安時代の書物には「火燧木ひきりぎ」（浄火を起こす道具）を朝廷に献上していたとされ、朝廷の信仰も得る存在でした。大和朝廷成立の頃から、火にかかわる信仰をもつ神社として知られ、現在も執り行われる「火祭り」はそこに起源があると言われています。

火祭りを見てみると、中心的な役割をつかさどる「ベンズリ」の服装は平安朝の武官そのものです。また、火の燃えあがる松明を持って駆け抜ける「火取り役」の姿は鎌倉期の山伏姿そのもので、祭りに関する禁忌やしきたりがことのほか厳しいことから、祭りの成り立ちには修験者などが深くかかわっていたものと推測されています。



往馬大社の火祭り

役行者の伝説～庄兵エ道しょうべえ

生駒山の中腹には、宝山寺から教弘寺や鶴林寺を経て平群町の千光寺まで通じる「庄兵エ道」があります。江戸時代に整備されたものですが、古くは修験者が山駆けをして修行する行者道でした。

また現在鶴林寺のある付近は鬼取山と呼ばれており、鬼の親子が棲みついて悪さを繰り返していたところ、役行者が現れて鬼を改心させたという伝説が残っています。

生駒山の独特の雰囲気、霊山として多数の修験者を惹きつけ、伝説が生まれ受け継がれてきたのです。

参考：『生駒谷の祭りと伝承』桜井満・伊藤高雄、『生駒谷の七森信仰』、今木義法 『生駒の祭礼』（教育委員会）



緑に包まれた市街地（萩の台駅から）

（３）緑のまとまりとまちの関係

１）緑の中に見え隠れするまちなみ

生駒の市街地は、竜田川と富雄川の流域を中心とする２つの谷筋の斜面に沿って発展してきました。

このため、谷筋から見上げると、斜面に残された樹木が緑の帯となって丘上の市街地を覆い隠し、背景の生駒山や矢田丘陵、西の京丘陵とあいまって、あたかも緑の中に家々がとけ込んでいるように見えます。緑に包まれたまちとして生駒を印象付ける、やさしい眺めですね。



高台から見下ろす緑豊かな生駒の市街地（あすか野）

2) 市街地に散りばめられた緑

竜田川流域の高台から市街地を眺めてみると、山や丘陵の緑を背景に、斜面地に残る緑や集落の森が緑の島のようになって、まるで市街地の海の中に浮き上がっているような印象を受けます。

遠近様々な緑が織りなす景色も、生駒らしい眺望景観のひとつです。

2. 地域性

集落・住宅地・まちなみ

それぞれから見える生駒の景観物語



2 - 1 . 集落の歴史

伝統と自然に寄り添う暮らし・モリ信仰
集落空間の根底にある景観





左上：写真中央にあるのが火の見櫓（萩の台）
 右上：道端のお地蔵さん（西菜畑町）
 左下：稲蔵神社（小明町）
 右下：共同の水汲み場（高山町）

（１）集落の成り立ち

1) 集落の中心と境界

生駒には、江戸時代に 23 の村があったそうです。村は住居が自然に集まった集落で成り立ち、大きな集落には水汲み場や火の見櫓ひみやぐらがつけられたところもありました。これらの場所は、集落の中心としての交流の場となり、その名残なのか、今では集会所や公民館などが建っているところもあるようです。一方、集落のはずれにはお地蔵さんや墓地、神社やお寺などが建てられたことが多いことから、境界を示していたのではないかと思います。

このように、集落は中心と境界のあるコミュニティとして、一つのまとまりを形成しています。



左上：石垣や生垣をほどよく組み合わせた家（藤尾町）

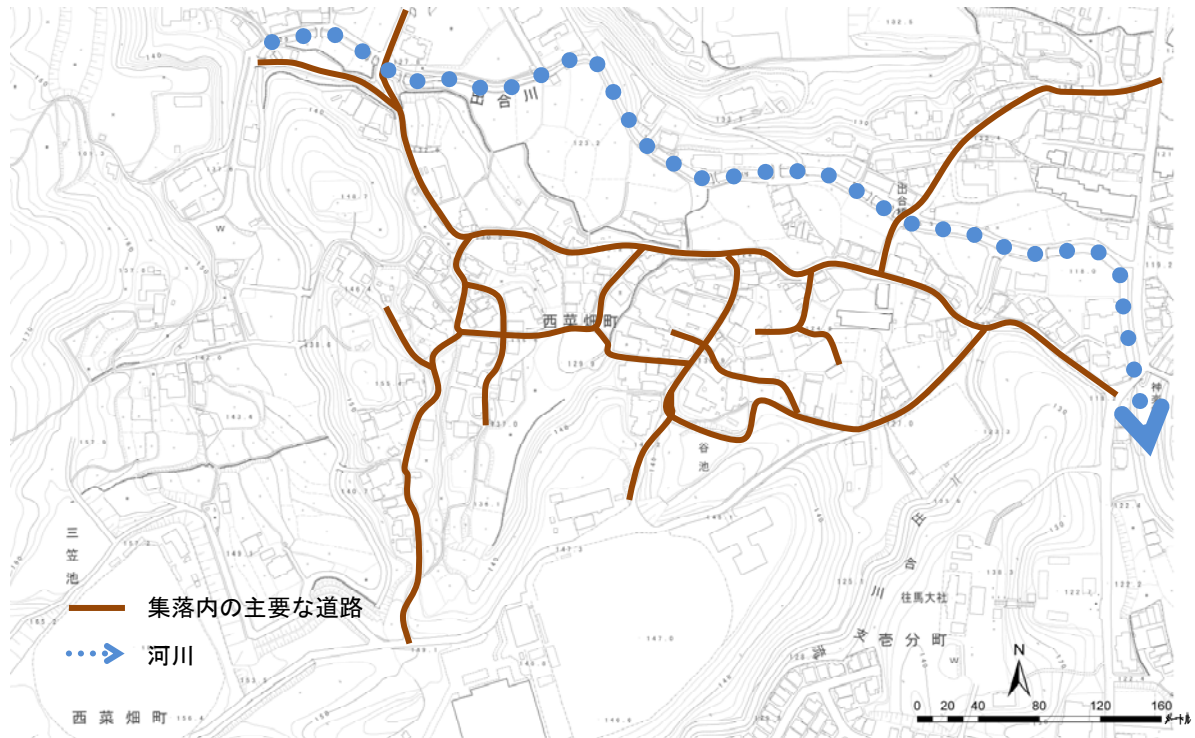
右上：屋根や壁が入り組んだ曲がった道（萩の台）

左：眺めの良い場所から見渡せる屋根なみ（萩の台）

2) 地形との関係

斜面地に広がる集落では、地形を尊重して凹凸に沿うように田畑が耕され、家が建てられてきました。例えば高低差が大きい場所では、石垣や生垣をほどよく組み合わせるなどの工夫がされています。こうした自然に寄り添う土地の使い方は、人の手によってつくられた景観として、見る者に安心感を与えます。

また、生駒谷では集落や社寺が斜面地にあることから、眺めの良い場所もたくさんあります。



上 : 道・川の曲線に寄り添うように建つ家 (西菜畑町)
 左下 : 敷地の外のことも内からうかがえ、また外からも内の
 気配がほどよく分かる敷き際 (新旭ヶ丘)
 右下 : 入口を目隠しする樹木 (南田原町)

3) 道との関係

山すそにある起伏の大きい集落の中には、等高線に沿った高低差のない道と坂のある道があります。多くの建物は道の形を変えるのではなく、沿うように建てられてきました。ここでも地形を尊重する姿勢がうかがえます。

また、内と外で互いに生活や季節の移ろいが感じられるような敷き際 (敷地の道路に接する部分) のしつらえを多く見ることができます。生活の一部が外へにじみ出ることにより、通りを表情豊かないきいきとした空間にしています。



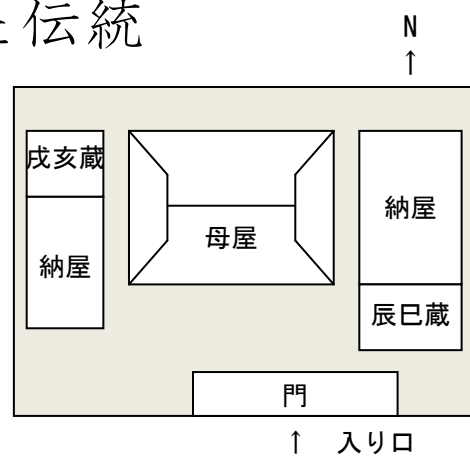
農家住宅（高山町）

（２）受け継がれてきた伝統

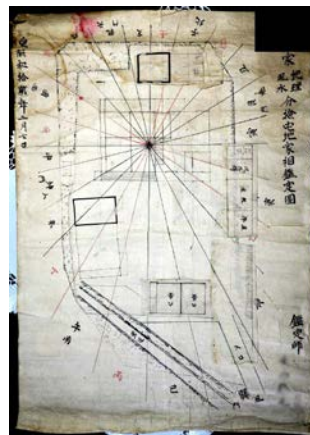
１）敷地内の建物配置

集落内の代表的な農家住宅は、母屋と付属屋から成り、蔵は二つあるのが一般的だったようです。配置される方角の名前を付けた北西にある「戌亥蔵」には道具や茶碗を、南東にある「辰巳蔵」には米を収納していました。また、農機具などの収納と作業場として納屋も設けられ、母屋との関係で配置が決まったそうです。

これらの配置は、広い範囲の集落で見ることが出来るため、伝統の様式と言うことができ、まとまりのある集落の景観を形成するための土台となっています。



農家住宅の一般的な配置



方角と家屋の配置を示した昔の鑑定図



左上：入母屋造りの屋根 三角形の部分が破風（高山町）

右上：門屋のある家（北田原町）

左：蔵の外壁 漆喰の化粧仕上げと杉の焼板張り（高山町）

2) 風土が練り上げたデザイン

集落では、気候や風土、生業などに合うように生活の中で工夫が重ねられ、長い年月をかけて磨かれてきた意匠（デザイン）があります。

代表的なデザインは、蔵の外壁や生駒石などを庭石や石積み用の石として使われるものが挙げられます。また、集落ごとに特有のデザインもあります。例えば、敷き際には立派な門屋を設けるところもあれば、庭木を植えるところ、生駒石で石垣をつくるところもあります。大和棟など独自に発展した屋根の形もあります。

このことは、各集落の職人の技術が明文化されない独特の約束事として受け継がれてきたこととも深く関係しています。練り上げられたデザインが、その集落らしい景観をつくり出しています。

生駒の住まいの伝統を守る ～大工さんのお話から～

生駒では昔から家を建てる場合、棟梁を筆頭に大工、左官、瓦葺などの職人が技を結集してつくり上げてきました。

家のつくりは似通っているように見えても、棟梁が地形や敷地の方角、地域で大切にされている習わしなどを考慮し工夫しているのです。二つとない家ができるのです。



福田さん

生駒に共通する建物の配置や間取り

生駒在住の大工、福田さんによれば、生駒谷における建物の配置や間取りには、共通点があるといいます。間取りは、通り庭、台所、牛屋、座敷からなり、二階は設けない場合が多かったようです。天井裏は「厨子」と呼ばれ、防火のために土を10cmほど塗り固めておき、この空間は、屋根を葺き替えるための材料として麦藁を収納しておくために利用されていました。麦藁を10年間ため続けると、ちょうど屋根一枚分ほどの量になったそうです。

屋根の形は「入母屋造り」が美しいと言われ、その「破風」（前ページ左上の写真）のつくりで大工や設計者の腕前が分かるそうです。木造建築に詳しく、経験豊富で技のある人しか、大きく立派な破風をつくることはできません。

生駒の各所で見られる大きな「門屋」は、男たちが夜なべ仕事をする「男衆部屋」や、奉公に来ていた人たちが寝泊まりする部屋として使われていました。門を設けるのが習わしとなっている集落もあり、門がないと違和感があるといいます。

伝統とは

「100年もつ家は、200年でももつ」。国宝姫路城の瓦の葺き替えも担当されている日本伝統瓦技術保存会会長である生駒の瓦葺職人、山本さんの談です。

伝統的な工法でつくった家は、日本独特の湿気の多い気候に合うよう改良が重ねられると同時に、長く住み続けることを前提として洗練されてきました。「骨格さえしっかりしていれば、屋根や壁の部分だけを補修しながら持続的に住み続けることが可能である」と仰っておられます。



山本さん

出典：市広報紙

一方で、「建築の技は変化するものであり、技術をさらに磨いていくためには、伝統を守ることだけが大切なのではなく、伝統技術の研究と試行の積み重ねが大切である」とも仰います。生駒の地でも長い年月をかけて、それぞれの職人の工夫と実践により、伝統は育てられてきました。その伝統が、今のまちなみの中に息づいて、生駒の景観の特徴として表れているのではないのでしょうか。

多くの家が建ち、生駒のまちなみもずいぶん変わってきました。しかしよく見ればその中にも、蔵・母屋・門のリズミカルな繰り返しや、屋根の勾配や形・壁の仕上げの美しさなど、伝統を受け継いだ家屋も見て取ることができます。

職人の方々は、「家は住民の人となりを表わす」と言います。時に応じて日頃の生活を振り返り、居住まいを正しながら暮らすことの大切さを教えられます。



モリさん（西菜畑町）

3) モリ信仰と風習

かつて各集落には、「七モリ」といわれる樹林地が存在していました。現在も生駒谷の各地にモリさんが伝承されています。

時代とともに人々の生活様式は変化し、七モリに対する畏敬の念も薄れていますが、世代を超えて様々な言い伝えとともに受け継がれ、生活習慣や空間利用の中にひっそりと息づいています。

市街地が拡大し、集落のまとまりもあいまいになりつつある中で、集落の境界に取り囲むように存在していた七モリは、古くからの集落の場所を知る手がかりにもなっています。

生駒谷の七モリの伝承

各集落にある七つのモリ

モリを神聖視する信仰は、原始的な民間信仰として日本全国で見られますが、それぞれの集落に七つずつモリが存在するという事例は、あまり類を見ません。

モリにはいくつかの形があります。樹林だけが生い茂っているモリが、本来の姿だったと考えられ、年輪を重ねた巨樹やうっそうと茂る樹林には神秘的な雰囲気漂い、そこに神が宿ると信じられてきました。そのほかには、樹林と石造仏や社などが祀られているモリもあります。



モリさん（萩原町）

萩原は信仰心の旺盛な土地柄で、往馬大社の神事を司る「宮座」が今も継承されています。この地では七モリもよく保存されており、生駒市教育委員会はモリに「保護樹林」の表示板を立てて、保護を呼びかけています。

七モリにまつわる伝承

モリの木を伐ると激しい祟りを受けると信じられていて、小枝一本折ってもいけない、枯葉一枚持ち帰ってもいけない、と禁じられてきました。戦時中に燃料が不足したときも、モリの樹には手をつけなかったそうです。禁忌を犯したために、恐ろしい祟りを受けたという体験談が、今も語り継がれています。



モリさん（西菜畑町）

一方で、モリの多くは集落を取り囲むような位置に祀られており、外から疫病神などの邪悪なものが入ってこないように、集落を守ってくれる守護神の役目もありました。村境にあるモリでは、「カンジョウ縄」を掛けて結界する行事を行っていたところもありました。

モリ信仰から学ぶこと

生駒で民俗学を研究しておられる生駒民俗会会長今木義法先生から、「モリさん」から学ぶことを教えていただきました。

～～先人たちが、モリのカミを畏敬し、厳しい禁忌を守ってきた信仰があって、その結果として、今の生駒の緑豊かな景観が守られてきたのです。こうしたモリ（自然）への畏敬の念を忘れてはならないと思います。



モリさん（萩の台）

往馬大社の社そう林は見事な原生林ですが、これは人間が手を加えて守ってきたのではなく、「手を加えなかったから守られてきた」のです。

急激に都市化されてしまい、モリのいくつかが消滅してしまいました。「モリを失ったことにより、自然を大切に守る豊かな心をも失ってしまった」のではないかと心配しています。

景観を考える上でも、まちの歴史と文化を大切にすることを養い、自然への畏敬の念を根底に据えることが大切だと思います。～～

参考：『生駒谷の七森信仰』今木義法

2-2. 住宅地開発の流れ

緑豊かな住宅地、生駒の顔となる駅前
生駒の発展物語





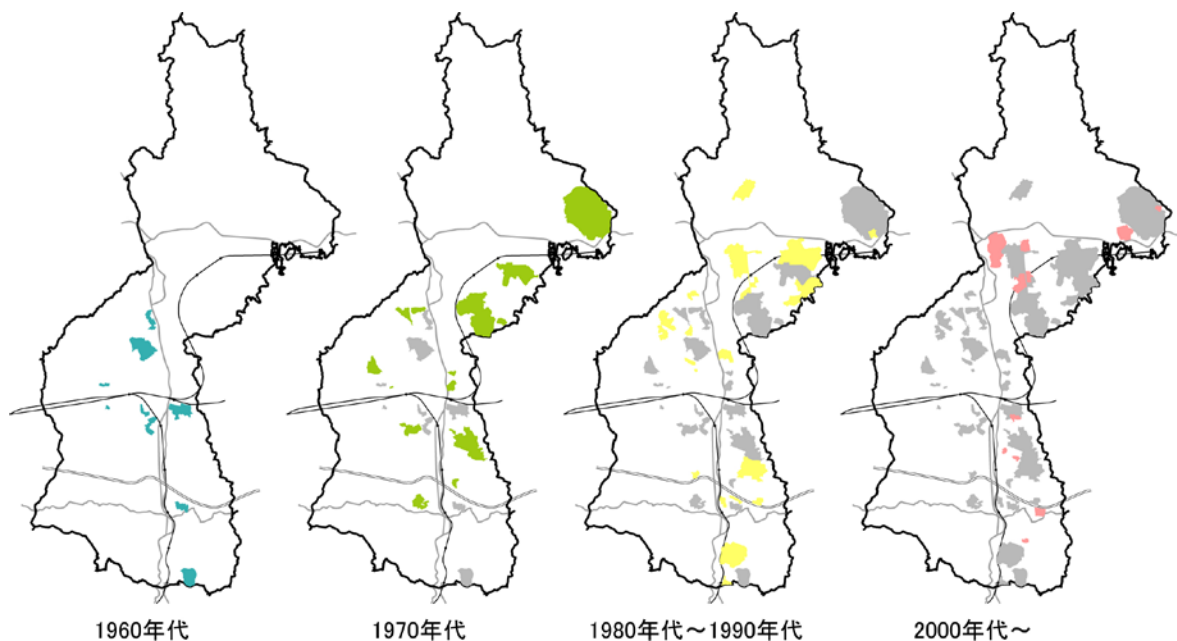
住宅地のまちなみ（喜里が丘）

（１）住宅地の開発と地形

１）平地から斜面地へ

鉄道が整備された 1960 年代以降、多くの住宅地がつくられてきました。当初は生駒谷の谷筋の平地などを中心につくられ、年代を経るごとに斜面地や頂上付近にも広がっていきました。

住宅地は、まちなみが似通っている部分も多く見られますが、つくられた年代によって立地する地形が異なっているため、それぞれに特徴が見られます。



年代を経て進んだ住宅地の開発

- 1960年代** 生駒谷の谷筋の平地を中心に、一部矢田丘陵の西向き斜面などで開発が始まる
- 1970年代** 矢田丘陵の西向き斜面、生駒山麓の東向き斜面での中小規模の開発、富雄川流域の斜面や山田川流域の南向き斜面などでの大規模な開発が進む
- 1980～90年代** 1970年代の立地傾向がさらに進むが、比較的標高の高いエリアでの開発が多くなる
- 2000年代～** 矢田丘陵の西向き斜面や東向き斜面を中心とする中小規模の開発のほか、山田川流域の南向き斜面も開発が進む

生駒の住宅地開発

鉄道の開設に伴い計画的に住宅地を開発してきた（株）近鉄不動産の担当の方に、生駒での住宅地開発の特徴についてうかがいました。

～～やはり、生駒は空気がきれいであることや緑が豊かであることを評価する方が多いですね。帰ってきてほっとできる住宅地なんだと思います。

昔は、住宅の立地は生駒山の東向き斜面が中心で、矢田丘陵側は少なかったのです。それは、生駒おろし（生駒山からの風）が強いためだと言われています。東生駒駅の設置とあわせて、周辺の矢田丘陵の西向き斜面での住宅地開発を進めましたが、生駒山への眺望があることも評価されて購入されたのではないのでしょうか。

ゆとりのある落ち着いた住宅地として開発の様々な場面で配慮しました。昔ながらの住宅地では、道路よりも敷地を 50cm～1m ぐらい高くして、擁壁には生駒石を使うことで風格あるまちなみを生み出すようにしています。

これからも大切に住み続けていただければ嬉しいです。～～



住宅地を見渡せる眺め（南山手台）

2) 住宅地を見渡せる場所

斜面地や標高の高い地域の住宅地には、眺めの良い場所があり、そこからは、市街地や山なみが一望できます。

これらの見渡す景観を「眺望」といい、谷の地形である生駒らしさを表した景観であるといえます。



通りの先に見える生駒山（さつき台）

3) 通りの先に見える山

通りの先に生駒山や矢田丘陵が見える住宅地では、自然にこれらを目印としていませんか。道案内のときに「生駒山に向かって右側」といった案内をされることもあるかと思います。このように、存在感のあるものが日常生活の中にとけ込むと、目印として方向を決めたりするものになります。

また、通りに面する敷地から見えるということは、そこで暮らす人にとって郷土愛を育むことにもつながっています。



表情をつくる敷地の際（きわ）（東生駒）

（２）住宅地の個性を生み出す要素

１）敷地内の緑の空間

通りから見える敷地の際（きわ）が、まちなみの表情を生み出す重要な要素となっています。

1960年代から1970年代につくられた住宅地では、敷地にゆとりがあることが多く、通りからも緑をたくさん目にするため、緑豊かなまちなみの印象をつくっています。



左上：石積みと生垣の敷き際（生駒台）

右上：生垣の敷き際（北大和）

左下：オープン外構の敷き際（西白庭台）

右下：オープン外構や擁壁の敷き際（美鹿の台）

2) 敷き際のしつらえ

石積みや生垣、擁壁、塀や生垣を設置しないオープン外構など、敷き際のしつらえは住宅によって様々です。

1960年代から1980年代につくられた住宅地では、石積みと生垣からなる敷き際を多く見ることができ、重厚感ある落ち着いたまちなみとなっています。

1990年代に入ると、オープン外構を多く見ることができ、軽やかな印象を与えるまちなみとなっています。



再開発事業で整備された生駒駅北側（谷田町）

（３）計画的に開発された市街地

１）まちの顔をつくる駅前空間

駅前には、生駒を訪れる人を最初に迎え入れる場所という意味で、まちの第一印象を左右する顔となる場所であるといえます。

生駒駅北口で進んでいる再開発事業では、建物のデザイン要素が絞り込まれるなどの一定の方針に基づき、洗練した印象を与える景観づくりが行われています。

顔となる空間をつくる

生駒駅の北口・南口の再開発に携わった市の担当者から、景観上配慮したことを聞きました。

●生駒駅前南口地区の再開発事業

「グリーンヒルいこま」(昭和58年)

- ・生駒山は駅からは丸みを帯びて見え、山というより丘陵のように目に映ります。それを意識し、スイスの切り立ったアルプス山脈というよりは、南欧のやわらかな山なみをイメージし、そのデザインを取り入れることとしました。



●生駒駅前北口第一地区の再開発事業「アントレいこま」(平成9年)

第四地区の再開発事業「アコールいこま」(平成17年)

- ・交通広場の中央に、奈良県出身の彫刻家・井上武吉さん製作のモニュメント「my sky hole 97 生駒」を設置しました。手のような丸みを帯びた形をしており、駅に向かって「行ってらっしゃい」「おかえり」を言っているような形になっています。
- ・再開発地区は、駅周辺にあるメディカルセンターをもとにして、全体的な色合いをそろえました。
- ・北口でも生駒山を意識しており、2階部分のデッキから生駒山を望むことができるようにしています。また、山なみを意識して円弧の形状を多く取り入れたデザインとなっています。





白庭台駅前の景観（白庭台）

2) 場所の声を聞きとるまちづくり

新しい駅がつけられると、駅を中心としたまちづくりが進められていきます。駅の雰囲気を読み取り、計画的にまちをデザインしていけば、駅から見渡す景観に統一感が生まれ、結果として特徴ある景観がつけられます。

例えば白庭台駅では、白庭台住宅地の玄関口として、調和したデザインを取り入れた形で病院やマンションなどが計画されました。さらに駅前には緑が植栽され、うるおいと落ち着きのある景観がつけられています。

2-3. にぎわいと心の 拠りどころ

宝山寺参道、商店街、身近な駅
人の集まる場所の景観





参道筋商店街（本町）



宝山寺門前町

（１）にぎわいの空気

１）かつての面影を偲ばせる参道の景観

生駒駅がつくられ、宝山寺に参詣する人が増えると、参道を中心に旅館や土産物屋、飲食店など参詣者をもてなすためのお店が軒を連ねました。

今でも、5～6mの幅の道路沿いに、花街の名残を留める和風建築物や風情ある看板、街路灯など、かつての面影を偲ばせる建物もあります。

門前町界限の情景

昔から参詣者を多く集める寺院や神社の周辺には、社寺関係者や参詣者を相手にする商工業者が自然に集まり、まちが形成されました。そのまちを門前町と呼び、全国各地に門前町があり「全国門前町サミット」が開催されるほどです。

生駒の門前町は、宝山寺の参詣者が増えるにしたがい、飲食店や土産物屋が軒を連ねるようになりました。さらに「生駒の聖天さん」と呼ばれ、現世利益を求める多くの人々が参詣するようになり、観光サービスの料理旅館や茶屋、置屋などができて発展しました。その後、大正時代には石段が舗装され、参道沿いは市街地へと姿を変えていきます。

今でも、その頃の名残を少しではありますが感じることができます。昔に思いを馳せながら、参道沿いの建物を眺めつつ、宝山寺へ参詣してみるのも良いかもしれませんね。



宝山寺門前町の様子（昭和40年頃）

石畳の敷かれた参道の両脇には、土産物店、料理旅館などが軒を連ねる参道からの眺めもまた売りのひとつ

出典：『大和郡山・生駒の100年』



びっくり通り（生駒駅前商店街）の様子（元町）

2) 商いが生み出すにぎわい

生駒駅前商店街では、様々な演出と工夫をしています。商店街内の道路とお店の間にほどよく商品を並べることで、商店主がお客とコミュニケーションを取りやすくしたり、季節感のある飾りや花で统一的に演出したりと、商店街という場所ならではのにぎわいの景観をつくっています。

お店とは

「店」という言葉を辞書で調べると「商品を陳列して売る場所。商店。たな。」とあり、「見世棚の略から」とあります。では、基となった「見世棚」を調べてみると「商品が見えるように並べてある棚。また、その棚のある店」とあります。つまり、お店とは商品が「見えるように並べてある棚」がある場所になりそうです。

お客とお店をつなぐ軒先に棚がずらりと並ぶ様子は、商店街ならではの景観であり、今も昔も変わらないことが宝山寺駅前の昔の写真からも知ることができます。



宝山寺駅前（昭和40年頃）

出典：『大和郡山・生駒の100年』



萩の台駅前の眺め（萩の台）

（２）住宅地の 駅周辺の空気

住宅地の近くにある駅は、住民が日常利用する玄関口として、生活にかかわりの深い場所です。駅前には緑が育てられ、帰ってきてほっとする親しみ深い景観が広がっています。



菜畑駅前の眺め（中菜畑）

近鉄生駒線のそれぞれの駅周辺からは、生駒山の姿を望むことができ、降り立つ人を安心させる景観となっています。さらに、生駒山の手前に広がる農地や集落と一体となった景観を目にすることができ、季節感を感じることができます。



上：国道 168 号沿道（東生駒駅付近）
左下：国道 168 号沿道（一分駅付近）
右下：戸建て住宅地沿いの緑豊かな
沿道（白庭台）



（ 3 ） 幹線道路の空気

国道 168 号の東生駒駅付近は、電線が地中化され、商業施設が建ち並ぶ中にも落ち着きある沿道景観をつくっています。

菜畑付近では、生駒山系、矢田丘陵に挟まれる形で国道が走っており、広い幅員の道路と街路樹と周辺住宅の緑が連なる気持ちの良い沿道景観をつくっています。

道路沿道は、広告物についての規制が適用されており、他都市と比較しても落ち着いたまちなみとなっています。

3. 暮らし

生業・祭礼・原風景
暮らしが織りなす景観





子どもたちが元気に公園で遊ぶ様子（桜ヶ丘）

（１）何気ない暮らしの景観

わたしたちが普段、何気なく目にするのは、人々の当たり前の暮らしの営みがつくる普通の景観、つまり生活景です。特別なものではないため、景観として意識することはあまりないかもしれません。しかし注意深く観察してみると、何気ない暮らしの景観の中にもいきいきとした暮らしぶりを感じさせる魅力的な景観がたくさんあることに気付かれるのではないのでしょうか。

このような生活景が、生駒の景観の大部分を占めています。



田園景観（高山町）

（２）生業の景観

１）農の景観

農地がつくる景観は、場所や時期によって様々な印象があります。平地に広がる農地では、手入れの行き届いた農作物と背後の山の緑が一体となって開放感を与えてくれます。また、斜面に沿った棚田は、その地形をいかし住民の手が加えられている様子を垣間見ることができ、そこに美しさを感じます。



棚田の景観（西畑町）

これらの農の景観は、生駒の景観の地をつくり、人々にとっての原風景のひとつとなっています。



竹の寒干し（高山町）

2) 伝統産業の景観

地域の風土の中で育まれてきた伝統産業が独特の景観を生み出しています。高山町では、茶釜や竹器づくりが盛んで、その材料となる竹の寒干しが、茶釜の里ならではの冬の風物詩となっています。

また、古くからの造り酒屋は、白い漆喰の壁が美しく、店先にある杉玉が映えて、伝統の景観をつくりだしています。



造り酒屋（小瀬町）

誇りをかけて守る伝統産業 ～高山の茶筌づくり～

高山茶筌のルーツは室町時代まで遡ります。大和鷹山城主の次男、鷹山民部丞たかやまみんぶのじょうにゆうとうそうせつ入道宗砌が創始と伝えられています。茶道の祖の村田珠光から千利休へと、茶道の隆盛と共に茶筌作りが活発になり、現在も高山茶筌はすべて職人の手作業によりつくられています。その国内生産のシェアは、全国の90%以上を占めています。



茶筌

この伝統産業である茶筌づくりを受け継いでおられる奈良県高山茶筌生産協同組合の谷村さんに、茶筌づくりについてうかがいました。

～～～材料となる竹は、高山近辺や近郊から調達しています。高山は、寒暖の差が大きいので、竹が引き締まるのではないのでしょうか。



谷村さん

茶筌づくりの作業は大変な仕事です。一日7本の茶筌を完成させて一人前と言っています。起きてから寝るまでが職人の仕事で、一日14時間くらい作業にあててます。夜の方が作業に集中できますね。

安価な海外製品が流入する中、先代が何とか日本の茶筌づくりを途絶えさせなかったのは、偉業だと思っています。茶筌づくりは家業なので、使命と誇りを感じています。技術を受け継ぐものとして、技術を守り抜いていくという自覚を持つことが大切。ずっと日本でつくり続けていくという、文化を守る姿勢はものづくりに共通するものではないのでしょうか。

工芸品というのは、高山で職人が一つ一つつくった結果生まれたものですが、価値はそれができあがる背景にあると思います。買い手にはこの背景の部分もちゃんと理解し、評価してほしいですね。一見同じ製品に見えても、背景の違いを理解すれば、また違って見えてくる。これはまちなみでも同じことで、まちの成り立ちなどの背景を理解することで、まちをより味わうことができる。

目が利く「文化人」が増えてほしいと切に思っています。価値観が変化し、古美術や骨董を求める人が少なくなってきました。良いもの、本物に価値を認め、お金を支払うような文化が廃れつつあります。

最近では、茶筌づくりのほかに、茶の文化を広めるための教室を開催しています。子どもと親が体験できる機会も、イベントに合わせて提供しています。茶筌を身近に感じることで、関心・興味を引き出し、次の担い手を増やしたいですね。～～～

(3) 記憶の原風景

1) 歌に込められたふるさとへの思い

後世に伝えていきたいふるさとへの思いが、和歌や校歌に織りこまれています。

市内の小学校の校歌には、生駒山が堂々たる姿で鎮座している様子や、人々から神聖視されている様子が、矢田丘陵を歌う言葉からは爽やかな表現が歌詞に使われています。

また、生駒川（竜田川）、富の小川（富雄川）は、清い流れと結びつきが強い表現が用いられています。

小学校の校歌に生駒の景色がうたわれています

- ♪ 若いのちの 歌声が 生駒の山に こだまして～ (生駒小学校)
- ♪ 生駒の山に ひびくのは～
生駒の川に うつるのは～ (生駒南小学校)
- ♪ 霊峰生駒を 仰ぎ見る～
富の小川の せせらぎの～ (生駒北小学校)
- ♪ 松のみどりに さきまじる つつじは あかく 矢田の丘～
雲は明るく たなびいて どっしりたった 生駒山～
流れきらきら 生駒川～ (生駒台小学校)
- ♪ 矢田のやまなみ 背にうけて 生駒山を ながめつつ～ (生駒東小学校)
- ♪ ～富の小川の せせらぎに～
～生駒の山に 親しんで～ (真弓小学校)
- ♪ ながれる雲よ広い空 生駒の山はよびかける～ (俵口小学校)
- ♪ 緑の風すぎゆく丘に みはるかす大和の山なみには 遠くはるかな歴史がたゆたい～
(鹿ノ台小学校)
- ♪ 古い歴史の生駒路を～
生駒おろしの吹く丘に～ (桜ヶ丘小学校)
- ♪ せせらぎは 富雄の川に～
浮ぶ雲 生駒の山に 交りて～ (あすかの小学校)
- ♪ 緑の野山にかこまれて～ (壱分小学校)
- ♪ 緑の山に 包まれて～
瀬々らぎ 澄みて 往く水に～ (生駒南第二小学校)



和歌に詠まれた生駒に流れる川

千早ぶる 神世もきかず 竜田川
から紅いに 水くくるとは

『古今集』巻五 在原業平

古歌に詠まれた竜田川（立田川）は、生駒山北部に発して、生駒山地と矢田丘陵の間の生駒谷を南流し、生駒郡斑鳩町南西部、三室山の南で大和川に合流する川を指します。上流部は生駒川、中流部は平群川と呼ばれます。

いかるがや とみのを川の たえばこそ
わが大君の み名を忘れめ

『拾遺集』 哀傷

富雄川はかつて富の小川と呼ばれていました。生駒山地北部に源を発し、生駒郡斑鳩町の東南端で大和川に合流する川を指します。

2) 地名から読みとる景観

生駒の地名は、自然の樹木や野生の動物などにちなんだ名前が多く見られます。このことから、生駒は自然豊かな地であったことが伝わってきます。

“クロ”

西五ヶ大字とは生駒山の南斜面中腹より山頂に至る地方に散在する集落で大門藤尾は稍々中腹に、小倉寺鬼取西畑はその上部に位置している。(中略)

古く万葉集に「妹に逢わずあらば、すべなみ岩根ふむ、生駒の山を越えてぞ吾が来る」(巻十五)とあるが如く、古代の人々がこの岩根を踏んで通っていた。(中略)

連続した今日の段々畑となるまでには徐々に開拓の歴史がある。最初は水田化の平坦を造るのに容易な緩傾斜部分から行なわれ、急傾斜地は残されて水田の縁辺部となる。これをクロという。ここはまだ原生林のまゝであって「中クロ」「黒沢」「大黒石」等の地名はここに付けられる。「くろんど池」は、「黒添池」でクロにある池を意味するといふ。富雄の「黒谷」などもこの類の地名である。最初はこのクロは原生の林のまゝで檜の木、楠の木、椿ヶ原、榊原等と呼ばれこれ等クロの木は農作物の乾燥や夏の木陰の休息地に利用され、又防風林となる場合も多く、農家の薪として燃料の供給に役立った。

出典：『生駒市誌』

3) 伝統行事の景観

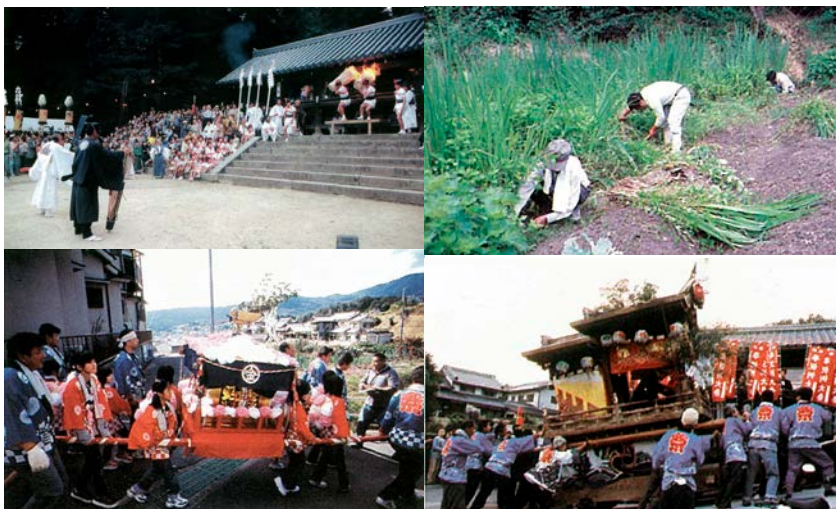
一年の間には、お正月、端午の節句、七夕などの日は、日常の風景を彩る日に、また人生の節目で訪れるお宮参り、七五三、成人式などの行事も日常の風景を特別な装いが華やかな景観に変えます。

暮らしの中に根付いたこれらの景観は、人々の記憶の中で生き続けます。

生駒の主な年中行事

1月元旦	歳旦行事〔さいたんぎょうじ〕
1月元旦黎明	往馬大社追鶏祭〔いこまたいしゃとりおいのみつり〕
1月中旬	小正月・トンド
2月3日節分	宝山寺節分星祭〔ほうざんじせつぶんほしまつり〕
4月1日	宝山寺大護摩会式〔ほうざんじおおごまえしき〕
4月第1日曜日	八大龍王春季柴燈大護摩供〔はちだいいりゅうおうしゅんきさいとうおおごまく〕〔鬼取町〕
5月5日	往馬大社御田植祭〔いこまたいしゃおたうえさい〕
6月30日	往馬大社夏越大祓〔いこまたいしゃなごしのおおはらえ〕
8月15日	往馬大社千燈明祭〔いこまたいしゃせんとうみょうさい〕
8月20日	長弓寺大般若会〔ちょうきゅうじだいはんにやえ〕
9月秋分の日	宝山寺万燈会〔ほうざんじまんとうえ〕
10月体育の日の前日	往馬大社例大祭（火祭り）〔いこまたいしゃれいたいさい〕
10月体育の日	素盞鳴神社例大祭〔すさのおじんじゃれいたいさい〕 伊弉諾神社例大祭〔いざなぎじんじゃれいたいさい〕
10月第3日曜日	高山八幡宮例大祭〔たかやまはちまんぐうれいたいさい〕
10月15日	住吉神社例大祭〔すみよしじんじゃれいたいさい〕
11月第3か4日曜日	宝山寺般若窟柴燈護摩供〔ほうざんじはんにかくつさいとうごまく〕
11月勤労感謝の日頃	新嘗祭〔にいなめさい〕
12月上・中旬	ご回在〔ごかいざい〕
12月16日	宝山寺大鳥居大注連縄奉納〔ほうざんじおおとりいおおしめなわほうのう〕
12月下旬	住吉神社南田原長寿講カンジョウ縄奉納祭〔すみよしじんじゃみなみたわらちようじゅこうかんじょうなわほうのうさい〕
12月31日	往馬大社師走大祓〔いこまたいしゃしわすおおはらえ〕

出典：『生駒市デジタルミュージアム』（教育委員会）



左上：火取り行事（往馬大社）

右上：コモキリ（高山八幡宮）

左下：御輿（琴平神社）

右下：ダンジリ曳き回し（天満神社）

出典：『生駒の祭礼』（教育委員会）



竜田川クリーンキャンペーンの様子（中菜畑）

（４）活動の景観

１）地域を守る取組

集落では古くから道普請や溝掃除など、身近な公共の場所の掃除活動が行われてきました。このような住民が自分たちの手で公共の場所を守る様々な活動が、良好な景観をつくりだしています。



地域で取り組む美化活動の景観（鹿ノ台）

2) 景観づくりの取組

わたしたちの暮らしを取り囲む景観に思いを馳せ、興味を持つことが、仲間をつくり、活動の幅を広げ、地域全体でのアクションへと発展していきます。

すでに生駒では、河川の清掃や里山の整備、棚田の維持管理、花づくり、子どもの環境意識の啓発など、景観づくりの活動が各所で活発に行われています。

第3章 パターンによる生駒らしい 景観づくり

第3章では、景観の特性から導き出した生駒らしい景観のパターンを使った景観づくりの方法を示します。

1. 生駒らしい景観のパターン

「生駒らしい」景観を考える手がかりとして、31のパターンを選びました

2章では「生駒らしい景観」を「地勢」「地域性」「暮らし」の視点から紹介しました。

3章では実際に「生駒らしい」と感じられる景観を、31のパターンに分類して紹介します。これらの景観のパターンは、生駒らしい景観づくりを考える上での手がかりとなるものですが、「生駒の良さ」はこれだけではありません。このパターンを基にして、みなさんで「生駒らしい良い景観」を感じ、考えてみませんか。

【こんな使い方ができます】

- このパターンは様々な「生駒らしさ」を切り取ったカタログのようなものです。そこに見える景観は、生駒のまちそのものです。生駒を理解する教科書としてぜひご活用ください。
- あなたがお住まいのまちの「らしさ」とは何でしょうか。このパターンの中にありましたか。また、「こんなふうにしてみたい」パターンがありましたか。このパターンを活用して、よりよいまちなみをみんなで考えることができます。

※ワークショップ形式での話し合いや、地域の方や子どもたちを対象に、お住まいのまちの景観の特徴をパターンを使って探してみるといったゲームを開催してはどうでしょうか。

パターンは、「生駒らしさの読み解き」「生駒らしさのために」「生駒らしさの工夫」の3つで構成されています

パターンの説明は、次の3つで構成されています。

◆生駒らしさの読み解き

生駒らしい景観の特徴をつくりだしているものは何なのかを解説しています。

◆生駒らしさのために

生駒らしい景観のために守るべきことと考え方を解説しています。

◆生駒らしさの工夫

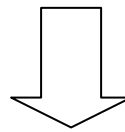
生駒らしい景観をつくりだすため、敷地単位での計画に応用できるものについては、写真を中心に工夫例を示しています。

これらを参考にして、あなたができる「生駒らしい良い景観」「生駒らしいまちなみ」を考えてみませんか。



← パターンの名称、分類が記載されています。

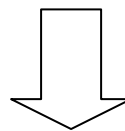
← **【生駒らしさの読み解き】 生駒らしさを感じましょう**
パターンが示す、生駒らしい景観の特徴を解説しています。



← **【生駒らしさのために】 これだけは守りましょう**
【生駒らしさの読み解き】で述べた生駒らしい景観を守り、つくり、育てていくために必要な考え方を解説しています。

この考え方に沿って、それぞれの立場で景観づくりに取り組んでいきましょう。

← このパターンと関連する別のパターンをリンク形式で示していますので、あわせてご覧ください。



← **【生駒らしさの工夫】 こんなことやってみましょう**
事業者や設計者が、建物や計画を考えるときに、パターンに基づいた手がかりと参考になる事例を掲載しています。

※写真の場所について、町名の表示がないものは、他市の事例になります。

← ※関連する事項、よもやま話などはコラムで掲載しています。

【こんな使い方ができます】

- 「生駒らしい」景観をつくっていく上では、市民のみなさんの日頃の活動がとても大切です。パターンの中には、ちょっとした工夫も紹介していますので、活動の中でいかしてみませんか。
- パターンを使って開発・設計にどのように反映できるのかを考えてみませんか。気に入ったパターン、使ってみたいパターンがあれば、設計者に相談してみてもいいでしょうか。
※景観アドバイザーに、生駒らしい住まいをつくるために必要なことを相談してみるのも良いですね。
- パターンを使ってまち歩きを行い、生駒らしい景観を探しに行きませんか。

パターン（単語）は、相互につながってランゲージ（文章）になります

いくつもの要素が組み合わさってまちなみができているように、それぞれのパターンは独立したものではなく、相互に関連性を持ってできています。パターンのページ内には、関連する別のパターンをリンクとして示していますので、続けてそのページを開いていただければ、さらなる情報を得ることができます。

また、パターンはいわゆる「単語」のようなものです。いくつものパターンを組み合わせることで、生駒らしい景観づくりの方法が展開できるようになっています。

本章においては、パターンを組み合わせながらデザインを考える手順の例を示しています。これらを参考に生駒の景観を語るあなたなりの「ランゲージ」を見つけ出してもらえればと思います。

パターンは、成長し続けます

「生駒らしい良い景観」を表すパターンは、ここに示す31の代表的パターン以外にもあります。是非、あなたなりのパターンを発見し、みんなで共有して行くことで充実していきましょう。

また、景観は時間とともに変わっていくものです。この計画書を見直す際には、景観の変化に応じてパターンを追加、あるいは削除することを考えていきます。

【パターンの一覧】

それぞれのパターンは、概ね、景観を捉える空間の大きいものから順に並べています。これらの中からその場所の特性にふさわしいパターンを選び、組み合わせて、生駒らしい景観づくりを進めていきましょう。

表 生駒らしい景観パターン

スケール	パターン	景観の構成原理				
		地勢	地域性			暮らしの営み
			歴史文化の文脈	市街地開発の文脈	界隈の空気	
都市	1 生駒のシンボル・生駒山	○	○	○		
	2 屋根なみに浮かぶ緑の島・緑の帯	○	○	○		
	3 ヤマ・ムラ・ノラの調和		○			○
	4 見渡す眺望	○		○		
	5 見通す眺望	○				
	6 緑にとけ込む建物	○		○		
	7 緑のスカイライン	○				
地域・通り	8 生駒山の修験の領域	○	○			
	9 顔となる空間			○	○	
	10 人が交わる場所		○	○	○	○
	11 曲がった道	○				○
	12 坂道の見上げと見下ろし	○				○
	13 通りのプロポーション			○	○	
	14 連歌式			○	○	
	15 高低差の尊重	○				○
	16 商いのコミュニケーション				○	○
	17 すっきり感				○	
	18 暮らしのにじみ出し				○	○
19 なりわいがつくる景観		○			○	
20 聖なる場（パワースポット）		○			○	
敷地	21 人の手が加わる余地					○
	22 人にあった尺度		○		○	○
	23 期待感		○		○	
	24 表出する緑			○		
	25 どこでも緑			○		
	26 しきりとつなぎ		○	○	○	○
	27 受け継がれてきたデザイン		○			○
	28 生駒石		○			
時間	29 仮設の風景					○
	30 移ろいの風景					○
	31 記憶の風景					○

【パターンの関係性についての表】

パターンがどのように関連しているのかを示しています。(それぞれのパターン内には関連するパターンをリンク形式で示しています)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
パターン ※注：左側の項目に沿って行方向（横方向）に参照する	生駒のシンボル・生駒山	屋根なみに浮かぶ緑の島・緑の帯	ヤマ・ムラ・ノラの調和	見渡す眺望	見通す眺望	緑にとけ込む建物	緑のスカイライン	生駒山の修験の領域	顔となる空間	人が交わる場所	曲がった道	坂道の見上げと見下ろし	通りのプロポーション	連歌式	高低差の尊重
1 生駒のシンボル・生駒山								○							
2 屋根なみに浮かぶ緑の島・緑の帯				○											
3 ヤマ・ムラ・ノラの調和					○										
4 見渡す眺望		○				○						○			
5 見通す眺望	○		○				○					○	○		
6 緑にとけ込む建物	○						○								
7 緑のスカイライン			○		○										
8 生駒山の修験の領域															
9 顔となる空間										○				○	
10 人が交わる場所									○						
11 曲がった道															
12 坂道の見上げと見下ろし															
13 通りのプロポーション					○						○			○	
14 連歌式									○				○		
15 高低差の尊重															
16 商いのコミュニケーション									○						
17 すっきり感									○	○				○	
18 暮らしのにじみ出し															
19 なりわいがつくる景観			○												
20 聖なる場(パワースポット)								○							
21 人の手が加わる余地										○					
22 人にあった尺度											○	○			
23 期待感								○			○	○			○
24 表出する緑														○	○
25 どこでも緑															
26 しきりとつなぎ															
27 受け継がれてきたデザイン											○				
28 生駒石												○			○
29 仮設の風景															
30 移ろいの風景															
31 記憶の風景	○								○		○		○		

	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31
パターン ※注:左側の項目に沿って行方向(横方向)に参照する	商いのコミュニケーション	すっきり感	暮らしのにじみ出し	なりわいがつくる 景観	聖なる場(パワースポット)	人の手が加わる余地	人にあった尺度	期待感	表出する緑	どこでも緑	しきりとつなぎ	受け継がれてきたデザイン	生駒石	仮設の風景	移ろいの風景	記憶の風景
1 生駒のシンボル・生駒山																
2 屋根なみに浮かぶ緑の島・緑の帯									○							
3 ヤマ・ムラ・ノラの調和				○								○				
4 見渡す眺望																
5 見通す眺望																
6 緑にとけ込む建物																
7 緑のスカイライン																
8 生駒山の修験の領域					○											
9 顔となる空間		○				○										
10 人が交わる場所	○					○										
11 曲がった道								○								
12 坂道の見上げと見下ろし							○									
13 通りのプロポーション							○									
14 連歌式						○		○								
15 高低差の尊重							○									
16 商いのコミュニケーション						○		○			○			○	○	
17 すっきり感																
18 暮らしのにじみ出し	○			○		○					○					
19 なりわいがつくる景観																
20 聖なる場(パワースポット)								○								○
21 人の手が加わる余地									○		○			○		○
22 人にあった尺度									○				○			
23 期待感					○											
24 表出する緑							○				○				○	
25 どこでも緑			○			○			○		○				○	
26 しきりとつなぎ	○		○			○			○		○		○	○	○	○
27 受け継がれてきたデザイン				○			○				○		○			
28 生駒石											○	○				
29 仮設の風景	○							○							○	○
30 移ろいの風景														○		○
31 記憶の風景				○	○		○								○	

【生駒らしさの読み解き】 生駒らしさを感じましょう



矢田丘陵から望む生駒山の姿（小瀬町）

生駒山は、生駒谷のどこからでも眺めることができ、独立峰のように際だったその美しい山の姿から、生駒のシンボルとして市民や訪れる人々にとっての目印（ランドマーク）になっています。

この象徴的な山の姿に人々は敬意や畏れを抱き、御神体として祀っていたと考えられる神社が往馬大社であり、山頂からちょうど真東の方角に位置しています。このことから、昔から生活の根底には生駒山が意識されてきたことがうかがえます。



雪の生駒山



往馬大社（壱分町）

【生駒らしさのために】これだけは守りましょう

○生駒山が見える場所では、その方向を意識して道路や住宅地、公園などの施設を計画しましょう。例えば、生駒山がよく見える場所に公園を配置したり、道路の線形を生駒山へあてたり（山あて）するような計画を考えましょう。



生駒山の方向を意識して道路を計画する

関連する
パターン

・ 8 生駒山の修験の領域

こちらも参照してください

生駒山の方角を向いた住宅地

かつては、生駒おろしの影響で、住宅の立地は生駒山の東向き斜面が中心だったのですが、東生駒駅の設置と合わせて、周辺の矢田丘陵の西向き斜面での住宅地開発が進められました。

こうして、「生駒山への眺望があること」がまちの特徴となり、現在でも東生駒やさつき台の住宅地からは、東西方向の道路の先に生駒山を眺めることができます。



東生駒



さつき台

【生駒らしさの読み解き】 生駒らしさを感じましょう



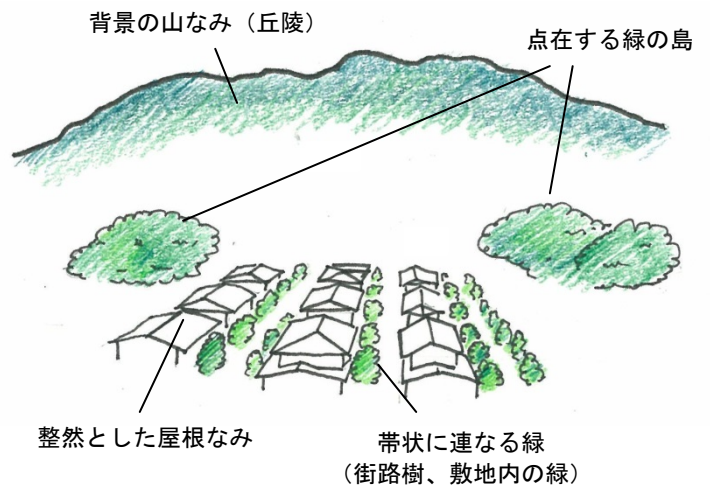
屋根なみに浮かぶように見える緑の島（萩原町）

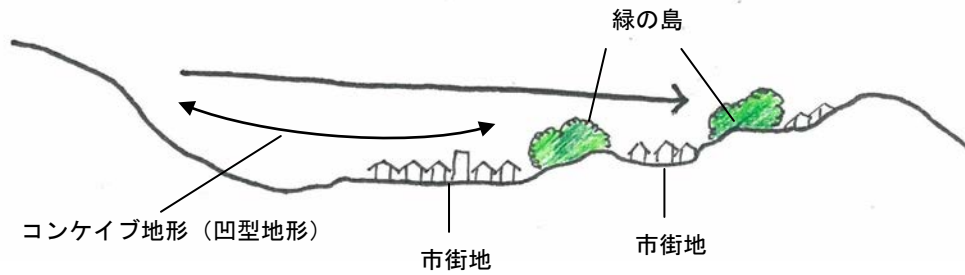
高台から眺めると、斜面地に残る緑や集落のモリが、山や丘陵の緑を背景に、市街地の海の中に浮き上がる「緑の島」のように見えます。

また、街路樹や敷地内の植栽が「緑の帯」のように連なって見え、整然とした屋根なみと緑が調和した眺望として、非常に印象深いものとなっています。



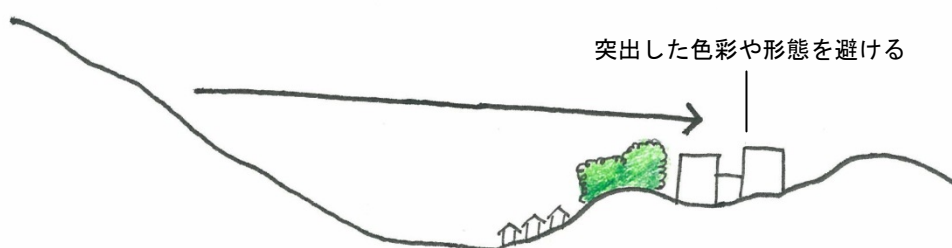
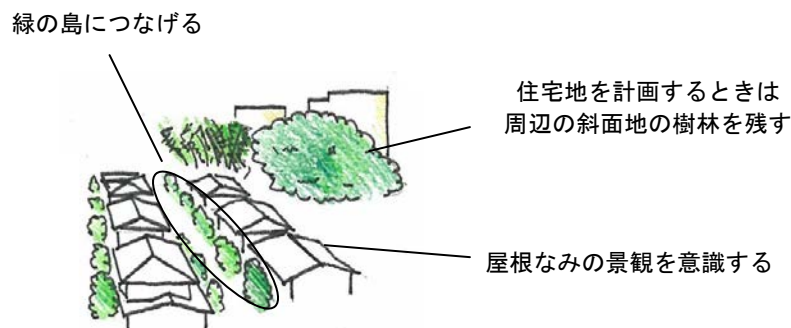
整然とした屋根なみと緑の調和（あすか野）





【生駒らしさのために】 これだけは守りましょう

- 高台から見下ろしたときに、「緑の島」として見える斜面地の緑や市街地内の緑のかたまりは、少量であっても大切に保全しましょう。
- 開発などによって緑を損なうことのないように、また緑化などのできる限り復元しましょう。
- 「緑の帯」としての連なりを意識し、緑の配置をそろえましょう。
- 公園などの公共空間から見下ろされる場所では、高い場所からの眺望を意識して、建物は周囲にある「緑の島」になじむようにデザインしましょう。



関連する パターン

こちらも参照してください

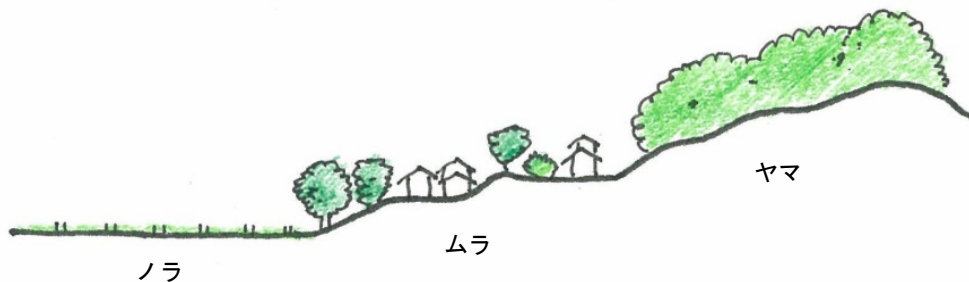
- ・ 4 見渡す眺望
- ・ 24 表出する緑

【生駒らしさの読み解き】 生駒らしさを感じましょう



ヤマ・ムラ・ノラで構成される田園景観（北田原町）

昔から人々の暮らしを支えてきた生業の場である農地（ノラ）は平地に広がり、また斜面に沿うようにつくられ、里山や奥山（ヤマ）、居住空間（ムラ）の三つの層が調和して、田園景観をつくっています。



ヤマ・ムラ・ノラの断面構成

「ヤマ」は、住民が生活に欠かせない薪や炭を取っていた場所でもありました。ムラを背後から包み込み自然の恵みとうるおいを与えています。

「ムラ」は、洪水などの災害を避けるために低地の周りの少し高いところに建物が寄せ合って位置しており、ヤマと同じ勾配の屋根が使われていたり、昔ながらの緑や土となじむ色彩の自然素材が多用されていたりと、ヤマやノラと調和した配置・形態・意匠が使われています。



まとまりのあるムラの建物（上町）

「ノラ」は、水が流れやすいように低地に位置しており、ムラからその様子が一望できるようになっています。ノラはのびやかな空間の広がりを生み、また季節によってその表情を変える、農の営みが目に見えて感じられる場所です。

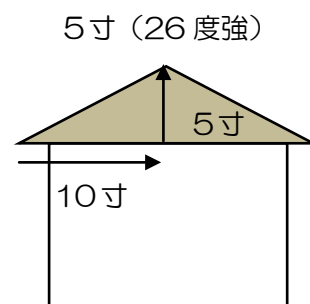
このように、自然に寄り添った生活の知恵が、農の空間をつくり、今でもなお生き続けています。

生駒の民家の屋根の特徴

市内で家づくりに長く携わる大工さんに生駒の民家の屋根の特徴を聞くと、「概ね5寸（26度強）勾配が標準」だそうです。

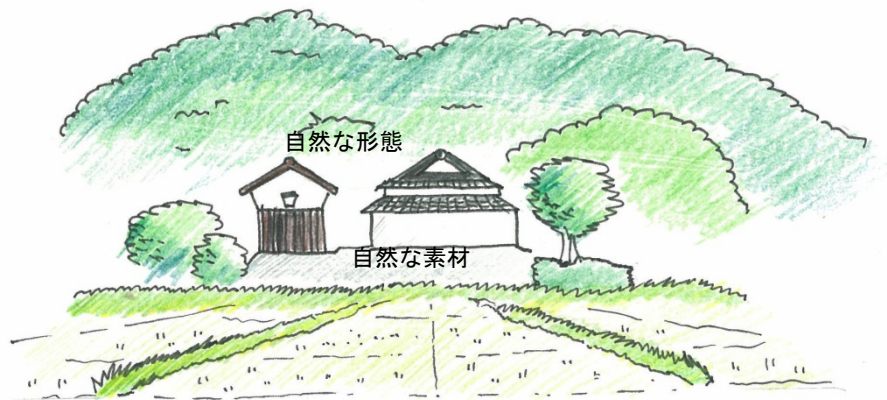
これは周りのヤマの緩やかな勾配と概ね一致しており、安定感のある景観に最もなじみやすい形態です。

周りの環境にあわせた家のデザインが、自然と取り入れられてきたのですね。



【生駒らしさのために】これだけは守りましょう

- ヤマ・ムラ・ノラという三層の空間の調和を大切にし、それぞれの景観としてのまとまりを損ねないようにしましょう。
- ヤマは、背景の緑として保全しましょう。もし、損なうことがあったら、できる限り復元しましょう。
- ムラは、建物同士をできるだけ寄せて配置するとともに、背景のヤマの緑やノラの農地にとけ込むような素材や色彩を使う、ヤマの勾配とあわせた勾配屋根を取り入れるなどの配慮を行いましょう。
- 三層の空間を眺めることができる道沿いは、眺望を遮るようなものを置くことや建てることは避けましょう。



関連する パターン

こちらも参照してください

- ・ 5 見通す眺望
- ・ 19 なりわいがつくる景観
- ・ 27 受け継がれてきたデザイン

【生駒らしさの工夫】 こんなことやってみましょう

○建物はムラの部分に集めましょう。



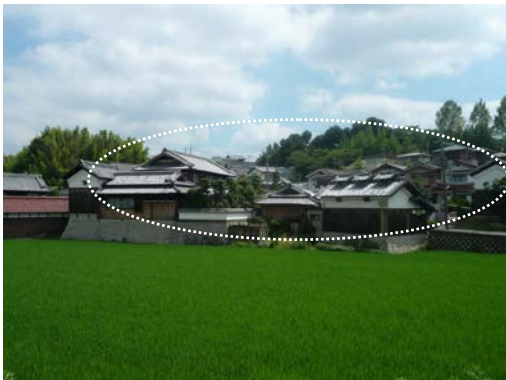
建物がまとまって立地する集落（上町）

○ノラ～ムラ～ヤマの構造を受け継ぎましょう。



田園景観に配慮したお店

○周りとなじむように、屋根の形や壁の色合いをそろえましょう。



屋根の材質や色合いがそろった集落（上町）

○ムラの意匠を受け継いだデザインを考えましょう。



長屋門を残したマンション

○道路から三層の空間への眺望を遮らないようにしましょう。



富雄川沿いの道路からの眺望（上町）

○土肌が露出するようなことがないように、緑化で隠しましょう。



緑で遮へいた造成地

【生駒らしさの読み解き】 生駒らしさを感じましょう



広がりのある眺望（門前町からの眺め）

生駒の市街地は、竜田川や富雄川などの河川を中心に、山と丘陵に囲まれた谷筋に形づくられています。

このため、高台から眺めると、谷筋のコンケイブ（凹型）地形に沿って建物の屋根越しに市街地や集落を見渡すことができ、爽快な眺望が広がります。

高低差の多い地形の生駒では、思いがけず雄大な見渡す眺望に出会うことができ、生駒ならではの景観を楽しむことができます。

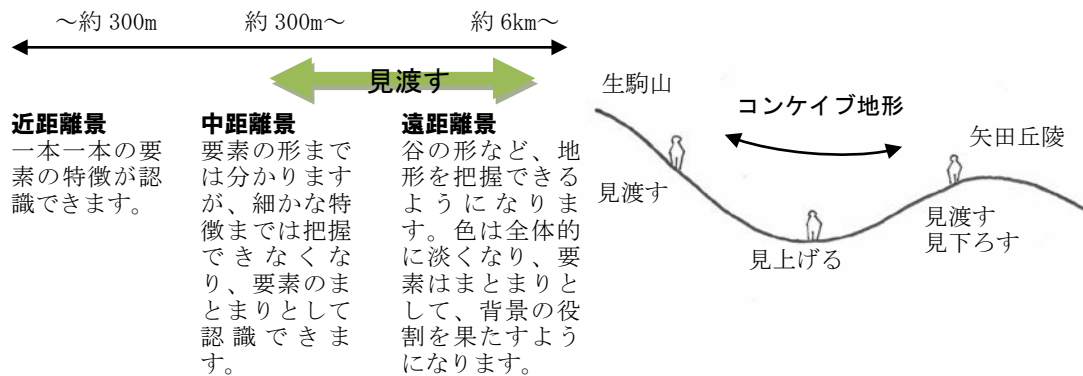
生駒のいろいろな眺望

眺望は、概ね数百メートルから数キロメートルくらいの距離にあるものを眺めたときに得られる景観です。見渡すほかに、見上げる（ぎょうかん仰瞰）、見下ろす（らんかん俯瞰）、見通すなどのタイプがあります。

生駒谷はコンケイブ（凹型）の地形なので、どこから見るかによって見えるものが大きく異なり、いろいろな眺望を楽しむことができます。

例えば矢田丘陵からは、生駒山の姿や、竜田川沿いの市街地も見渡すことができます。生駒山の山麓からは、生駒谷のみならず奈良の方向を広く見渡すことができます。

普段の生活から、生駒の豊かな表情を少しだけ意識してみませんか。



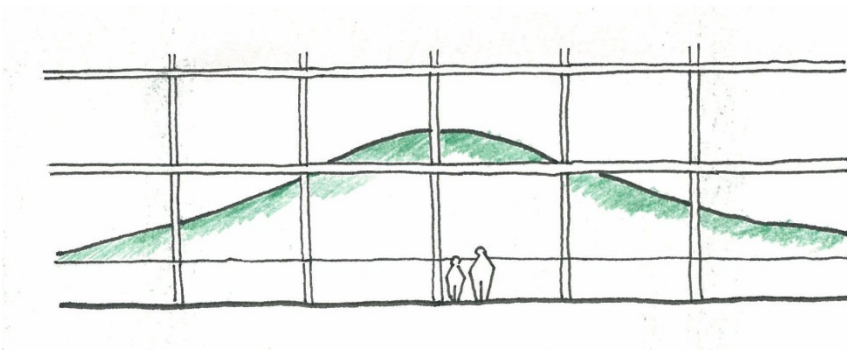
出典：樋口忠彦『景観の構造』

【生駒らしさのために】 これだけは守りましょう

- 見渡す眺望が得られる場所を大切に守りましょう。高い場所からの眺望を建物が障害してしまわないように配慮しましょう。
- 住宅地の開発などにより公園を計画するときには、見渡す眺望を楽しめる最も適した場所を考えましょう。
- 眺望を様々な人が楽しめるような配慮や工夫を取り入れましょう。多くの人が集まる公共性の高い場所や行き来する道などで見晴らしが得られる場合には、特定の敷地のみが独占することのないように開放しましょう。



見渡す眺望を楽しめる四季の森公園（北大和）
生駒山への眺望を確保するために
その方向には樹木を置いていない



眺望点を生み出す
建物を建てる時には眺望を
楽しめる場所をつくる

関連する
パターン

こちらも参照して
ください

- 2 屋根なみに浮かぶ緑の島・緑の帯
- 6 緑にとけ込む建物
- 12 坂道の見上げと見下ろし

眺望点

生駒谷では、見渡す眺望が楽しめる、誰でも入ることができる公共的な場所があります。

下の図はおすすめスポットです。このほかにもたくさんあるので、お気に入りの場所を見つけてみてはいかがでしょうか。



宝山寺付近
生駒の市街地や
矢田丘陵、奈良方
面を望む



歓喜の湯 足湯
正面に生駒山が、
眼下に市街地が
広がる



日本庭園に学ぶ

日本庭園の中には、借景（^{しゃっけい}周りの風景を取り込み、庭にいかす）の技法を使って、周辺の眺望を巧みに庭造りにいかしているものがあります。

代表的なものは、京都の圓通寺で、建物からの眺めがフレーム（額縁）のように収められており、あたかも絵画を見ているようで、こうした技法を「いけどり（フレーム）効果」といいます。

また、比叡山への眺望をいかし、そのほかのものが視界に入らないように、前面にうまく庭木を配置することを「見切り」といいます。



フレーム（額縁）のようにいけどられた眺望



手前に植栽を配置して、下のほうの視界を遮り、比叡山への眺望を切り取る

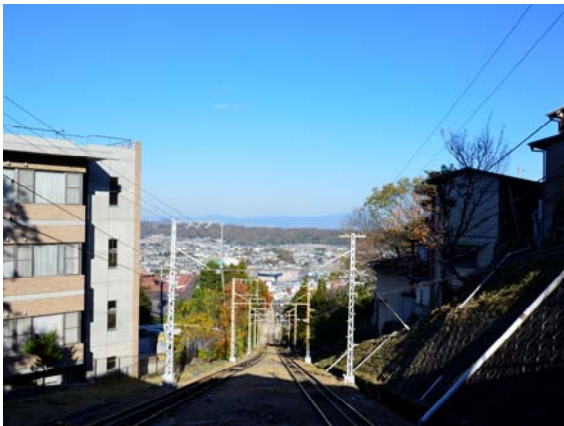
【生駒らしさの読み解き】 生駒らしさを感じましょう



富雄川の見通し（上町）



幹線道路の見通し（俵口町）



ケーブルカーからの見通し（元町）



住宅地内の道路の見通し（西白庭台）

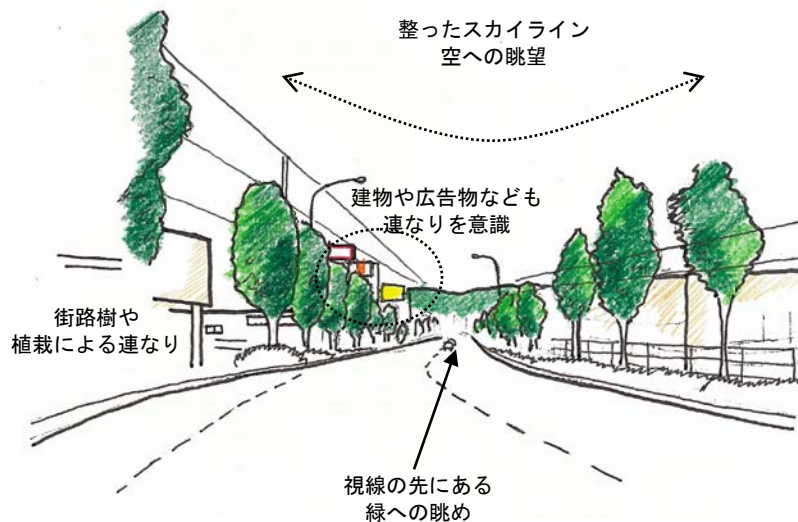
道路・線路・河川は、直線に延びていることから、まっすぐ見通す眺望が得られます。

街路樹や建物の屋根なみ、植栽などが連なって、視線を奥の方へと導きます。計画的に開発された住宅地などでは、視線の先に生駒山や丘陵の緑を見通せる通りがあり、緑豊かなまちであるという印象を高めています。また、通り沿いの建物がつくる輪郭の線（スカイライン）が整うことで、空が開けて見え、気持ちの良い眺望が得られます。

特に、生駒の市街地は、谷筋につくられていることから、谷筋に沿った南北方向には、道路・河川沿い、橋の上などから遠くまで広々と見通せる伸びやかな眺めが得られます。

【生駒らしさのために】 これだけは守りましょう

- 通りの連なりや見通し、背後のスカイラインを妨げないよう、できるだけ周りと調和した規模や形態にしましょう。
- 通りが連なって見えるように、隣接する建物との調和や、植栽による連続性の演出などを取り入れましょう。
- 通りの先に山などの緑が見える場合は、周辺から突出して眺望を遮らないようにしましょう。
- 特に、谷筋の道路・河川がつくるお椀の底型の広がりある地形、空間の眺めを大切にしましょう。



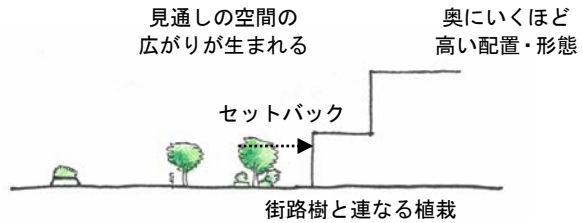
関連する パターン

こちらも参照して
ください

- ・ 1 生駒のシンボル・生駒山
- ・ 3 ヤマ・ムラ・ノラの調和
- ・ 7 緑のスカイライン
- ・ 12 坂道の見上げと見下ろし
- ・ 13 通りのプロポーショナル

【生駒らしさの工夫】 こんなことやってみましょう

○建物の高さは、通り沿いはできるだけ抑えることで、見通す眺望の広がりある空間が得られ、逆に高くなると圧迫感を増し、見通しを妨げます。通りから敷地の奥にいくほど高くなるよう配置や形態を工夫しましょう。



○河川の方を意識して緑を配置するなどの工夫をしましょう。



河川沿いに植栽を配置したマンション

○うるおいある河川空間との「つなぎ役」を果たすように、敷き際や建物の手前に植栽を施したり、自然素材を使用したりしましょう。



既存の建物、石積みなどを活用し、植栽を配置したお店

魅力的な河川であり続けるために

河川の空間とその周りの建物や丘陵の緑が一体となって魅力を発揮するためには、河川が美しく表情豊かである必要があります。近所に住んでいる人たちと一緒に、お手入れをして、魅力的な河川づくりを育みませんか。

「地域が育む川づくり事業(県)」も活用できます。



住民が手入れを行っている富雄川(上町)

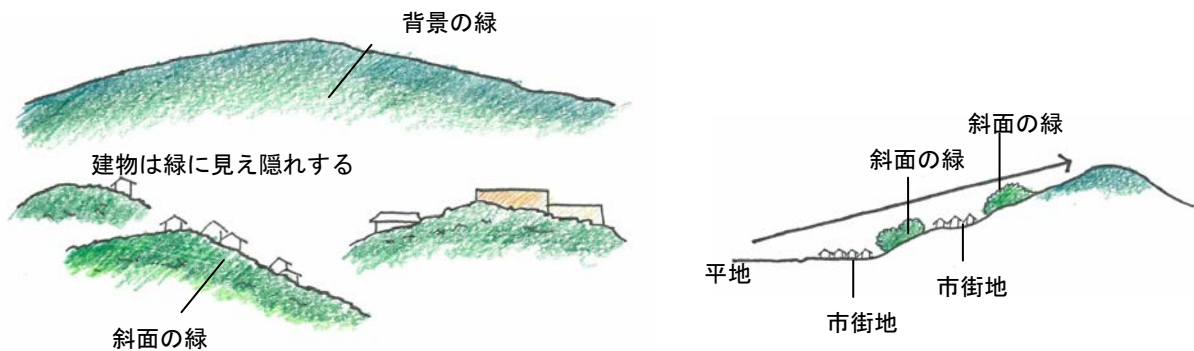
【生駒らしさの読み解き】 生駒らしさを感じましょう



緑の中にとけ込む建物（北大和）

谷筋の平地から見ると、斜面のあちこちにある樹木・樹林が「緑の帯」のように市街地を覆い隠し、背景の生駒山や矢田丘陵、西の京丘陵の緑とあいまって、あたかも「緑の中に市街地がとけ込んでいる」ように見えます。

この眺めが、緑に包まれたまち生駒を強く印象付けています。



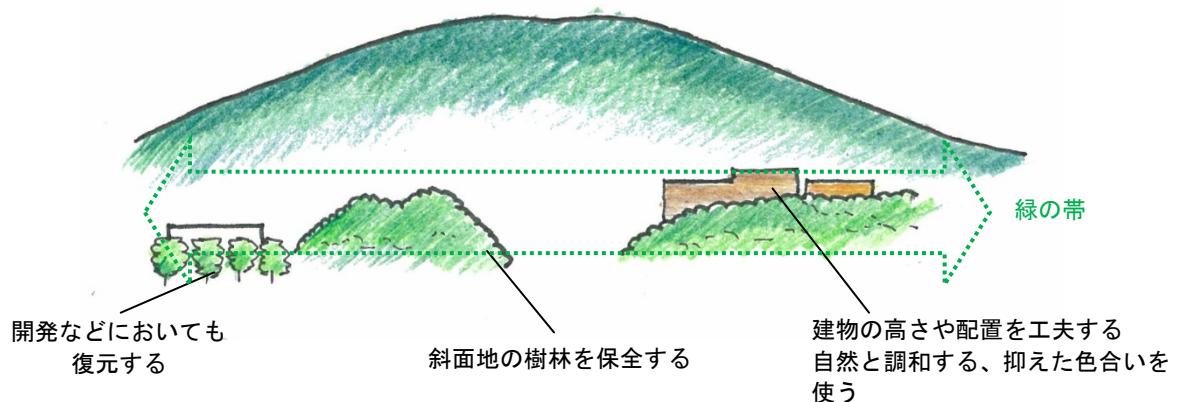
「見え隠れ」の美学

緑の中にとけ込み垣間見ることのできる建物は、視点が動くにつれてはっきりと見えたり緑の後ろに隠れたりします。このような状態を「見え隠れ」といいます。また、日本では古来より物陰からちらりと見えるもの、薄暗い中にほのかに見えるものに美を見出す、独特の感覚が受け継がれているといわれています。

緑に包まれた生駒のまちには、わたしたちの心に訴える「見え隠れ」の美学が息づいているといえるのではないのでしょうか。

【生駒らしさのために】これだけは守りましょう

- 谷筋から見上げたときに見える斜面地の樹林は、緑の帯として、たとえ少量であっても大切に保全しましょう。
- 緑の帯が損なわれることのないよう、建物を計画するときは、緑化などによりできる限り復元しましょう。
- 竜田川と富雄川の二つの流域がつくる谷筋からは、どこからでも背景の緑が見えることを意識し、緑にとけ込むように建物の高さや配置を工夫する、緑となじむような色彩や材料を使う、前面に植栽を厚く配置するなどしましょう。



関連する パターン

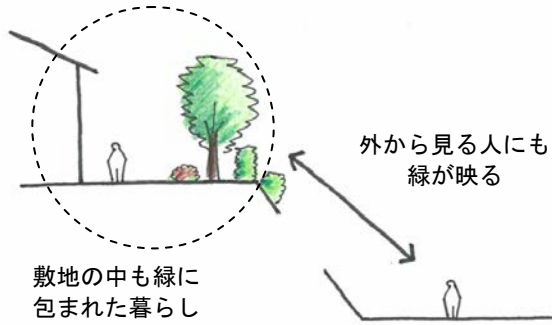
こちらも参照してください

- ・ 1 生駒のシンボル・生駒山
- ・ 7 緑のスカイライン

緑に包まれた暮らし

敷地の中で植栽するときは、斜面の谷の方にできるだけたくさん樹木を植えたり、生垣にしてみましょう。

見晴らしの良い場所は逆に周りからもよく見えます。植栽などは普段からの維持管理をきちんとすることで、外から見える緑がより一層よく見えます。緑に包まれた暮らしを楽しみましょう。



光陽台

樹林地を「みんなで」育む方法

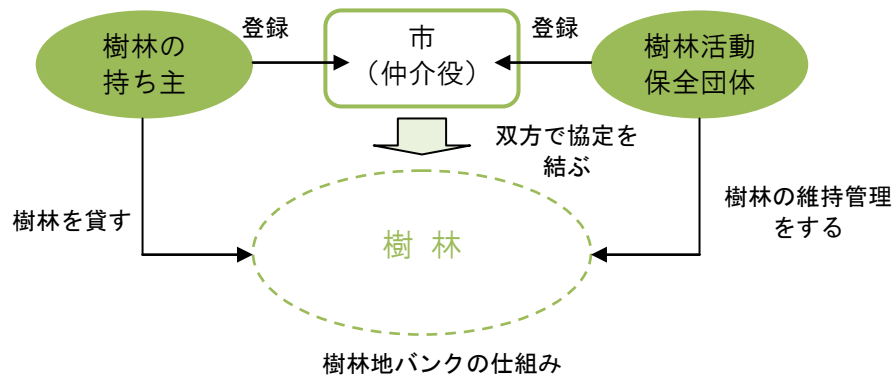
地域のみなさんや、自然が好きな市民活動団体などが手助けしてくれる、仕組みもあります。



<活動紹介：鹿ノ台自治連合会

「ECOKA 委員会」>

近年の住環境への住民意識の高まりとともに、量的な緑環境より緑地全体の質的向上を実現するため、平成20年に「ECOKA 委員会」を設立、住宅地の周りに12箇所ある保存緑地（12ha）の森の再生に向け、協働・連携のもとで計画的に整備（下草刈、間伐、植樹）しています。



【生駒らしさの工夫】 こんなことやってみましょう

○斜面地の緑、特に谷側の樹林地はできるだけ残しましょう。



緑と建物が調和したまちなみ（高山町）

○建物は斜面の緑にとけ込むように配置しましょう。



周りの緑にとけ込む建物（高山町）

○斜面の擁壁は緑化し、圧迫感を軽減させましょう。



斜面を緑化した住宅地（高山町）

○建物が緑で隠れるように、敷地の前に植栽を配置しましょう。



緑で隠れた建物

○緑になじむ色彩を選びましょう。



落ち着いた色合いで緑にとけ込む（高山町）

○緑が映える色彩を選びましょう。



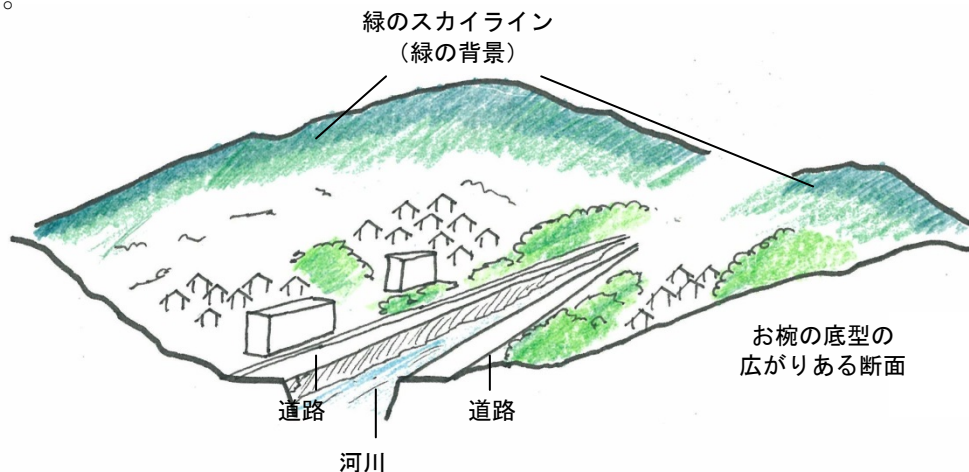
建物が背景となって緑が映える

【生駒らしさの読み解き】 生駒らしさを感じましょう



富雄川沿いの緑のスカイライン（上町）

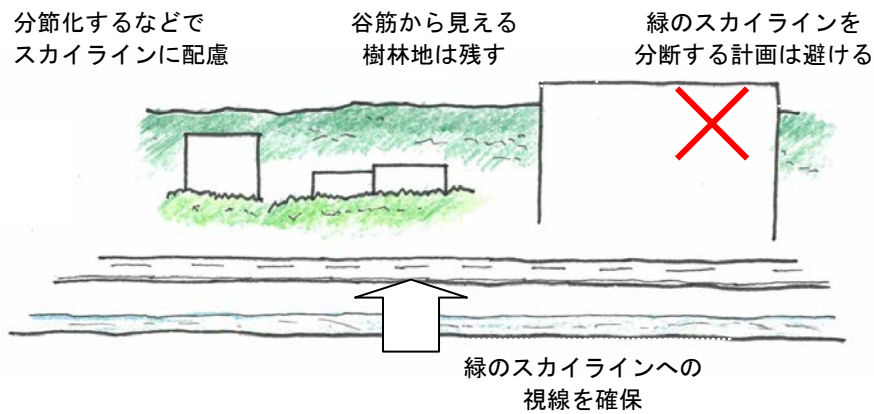
竜田川・富雄川の谷筋では、どちらを向いても河川の水面とあわせて生駒山系や矢田丘陵の緑のスカイラインが背景として映り、緑が豊かな景観の印象をぐっと高めています。古くからの集落もこの緑の背景にとけ込むように位置しています。



【生駒らしさのために】 これだけは守りましょう

○谷筋の河川・道路沿いから緑のスカイラインが連なって見えるように、谷筋の緑を保全しましょう。

○谷筋に建物を計画するときには、背後の緑のスカイラインを大きく分断しないように、建物を分節化するなどの工夫をしましょう。



関連するパターン

こちらも参照してください

- ・ 3 ヤマ・ムラ・ノラの調和
- ・ 5 見通す眺望
- ・ 6 緑にとけ込む建物

【生駒らしさの工夫】 こんなことやってみましょう

○建物が露出すると、「高いところから見下ろされている」「緑がなくなった」という印象が強くなってしまいます。緑のスカイラインを保全した開発を考えましょう。



緑のスカイラインが保全された住宅地（白庭台）

○住宅地開発などの面的な宅地造成では、地区内の住宅からの緑豊かな眺めを得られるよう、周辺の緑を保全することに意識が向きますが、地区外から見たときの見え方は案外意識されない場合もあります。特に川筋からの住宅地全体の見え方を意識しましょう。



富雄川から見た住宅地（上町）

○すでに宅地開発が済み、緑のスカイラインが途切れてしまった場合でも、谷筋に向かって樹木を植栽することで失われた緑のスカイラインを復元しましょう。



緑のスカイラインを残す植栽の工夫